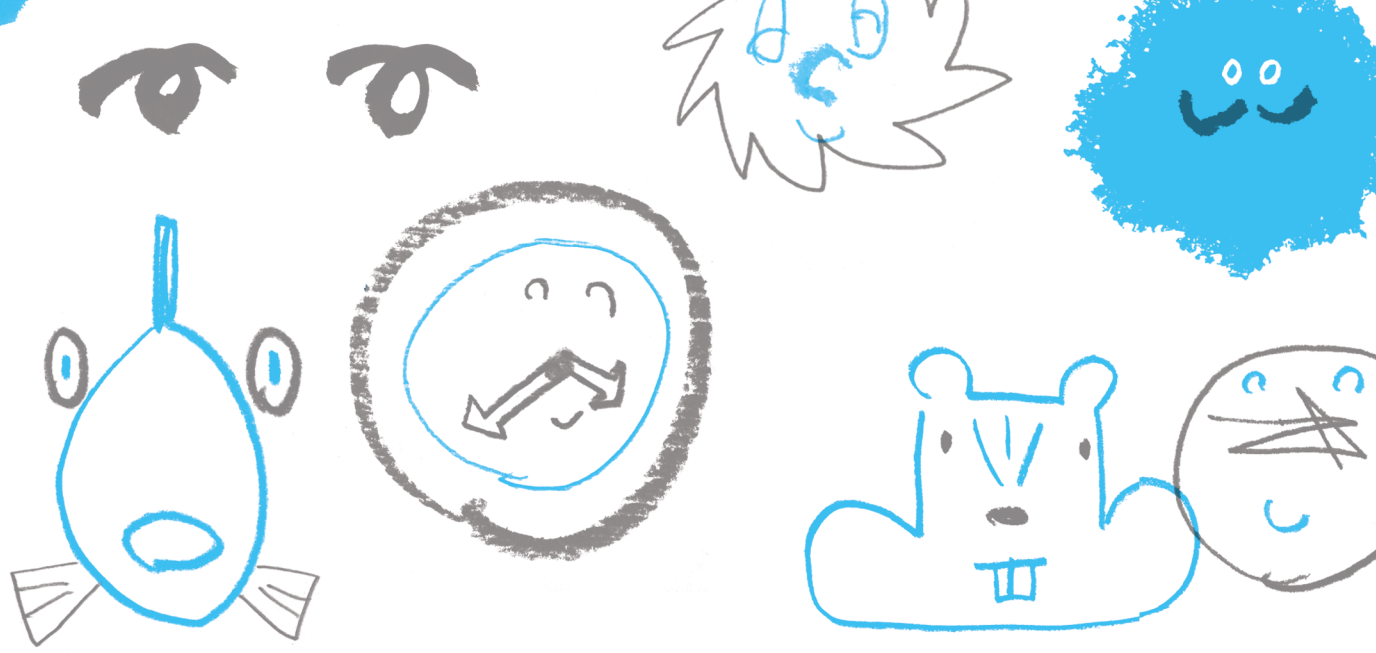
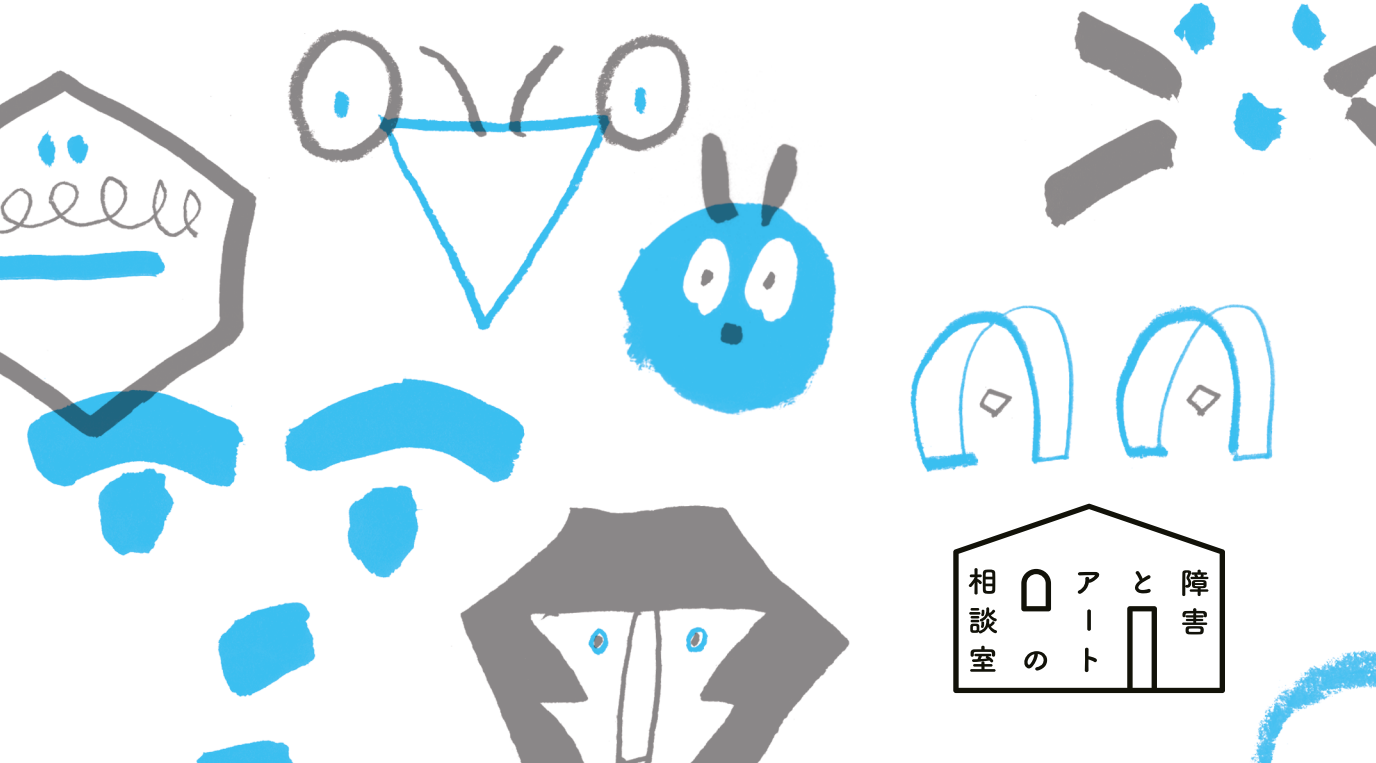


オープンアトリエのつくりかた

表現の場をひらいてつながるためのヒント集



障害とアートの相談室

【オープンアトリエ】

障害のあるなしにかかわらず誰もが参加できて、自由に表現を楽しむことができる“場”や“活動”のこと。

※障害とアートの相談室がつくった造語です

はじめに 4

ヒント

1 まずは場所、そして時間 8
2 机の並びとコミュニケーション 9
3 大きなうんこのオブジェ 10
4 一人きりになれる空間 11
5 何だって素材になる 12
6 一人ひとりに合った画材 13
7 創造力を掻き立てる資料 14
8 汚してもいい環境 15

インタビュー

① アーピカル☆ 16
② bamboo 18

ヒント

9 見守っているだけでもいい 21
10 色鉛筆の渡し合いっこ 22
11 表情や体の動きに目を向ける 23
12 必要なサポートを聞いておく 24
13 タイムテーブルを決める 25
14 小さな遊びを用意する 26
15 「やってみたい」をプログラムにする 27
16 アーティストを招いて 28
17 合作俳句 29

インタビュー

③ あーと工房みずのみば 30
④ アートサポートセンターRAKU 32

ヒント

18　みんなの居場所　36
19　名前だって表現だ　37
20　みんなの作品置き場　38
21　スタッフだって表現したい　39
22　スマホも表現の道具　40
23　誰かを傷つけるかもしれない表現のこと　41
24　表現を分かち合う時間　42
25　おしゃべりアートサロン　43
26　展覧会の効能　44
27　公募展に出そう　45

インタビュー

⑤　iTohen　46
⑥　FabCafe Kyoto　48

ヒント

28　なるべく早く発信する　52
29　作品、町へ行く　53
30　素材がつなぐ縁　54
31　デザインにもこだわりたい　55
32　それ、うちでやってみない？　56
33　参加費をもらう　57
34　福祉制度を活用した運営　58
35　仲間は意外と身近にいる　59

インタビュー

⑦　ココルーム　60
⑧　オープンアトリエ mirumiru　62

各地のオープンアトリエ（関西版）　65
おわりに　66

はじめに

この冊子はオープンアトリエをつくるためのヒントを集めたものです。
ところで、オープンアトリエってそもそも何でしょう？
私たち障害とアートの相談室は、障害のある人をはじめ、誰もが自由に参加できて、表現を楽しむことができるスペースや活動を「オープンアトリエ」と呼び、それらのあり方や可能性について考えたり紹介したりする活動を行ってきました。
表現を楽しめる場があることは、障害のあるなしにかかわらず、私たちの暮らしを豊かにしてくれます。また、日々続いていく日常から少し離れて息抜きができるような場が生まれることにもつながっていくでしょう。「もっと身近にいろんなオープンアトリエがある社会になればいいのになぁ」 そんな想いから、私たちはオープンアトリエに関するワークショップを行ったり、ハンドブックを制作したりしてきました。

この冊子について

今回私たちは、オープンアトリエをもっと広めていくために、「自分のスペースをもっとひらいていきたい」「表現を通じて交流の場づくりをしてみたい」と考えている人たちに向けて、具体的な1歩を踏み出すための後押しとなるような冊子づくりに取り組みました。
まず、既に関西でオープンアトリエ的な活動を行っている7つの団体への訪問調査を実施。それぞれの団体が取り組みの中でどんなことを大切にしているのか、オープンなスペースをつくるためにどんなことを実践しているのか、その“コツ”を探りました。そして、その調査の中で発見されたコツをさらに精査し、「こうすればオープンアトリエがつくれる（かもしれない）」というヒントとしてまとめました。

オープンアトリエを考えるための4つの視点

この冊子において、オープンアトリエにとって特に大切だと考えた視点は次の4つです。
・表現が軸：活動の中心にアートがあり、誰もが自由に自分らしく表現することができる。
・ひらく：多様な人が参加することができる。また、地域の人やお店など、外部との交流も生み出している。
・関わり合う：参加したり関わっている人同士のコミュニケーションを生み出している。
・続ける：定期的・継続的にアトリエ活動を行っている。

この４つの視点をもとに、福祉施設からNPO、絵画教室、企業やものづくりに関心のある人が集まるスペースなど、さまざまな場や活動からヒントを探しました。

この冊子の使い方

オープンアトリエをつくるためのヒントを、できるだけ具体的に、明日からでも取り組めるようなかたちで紹介しています。みなさんが「こんなことをしたいな」「どうすればいいのかな」といった期待や悩みに出会った時には、ここに載っているヒントを実践してみてください。
それぞれのヒントには「＃（ハッシュタグ）」が付けられています。ハッシュタグには、そのヒントが発見された団体の名前と、そのヒントの分類が付いています。分類は全部で８つ。

＃表現したくなる空間
＃創作のサポート
＃表現を分かち合う
＃場を開く
＃道具と材料
＃プログラム
＃自由な居場所
＃続けるために

もちろん、はじめからすべてを読んでもらってもいいし、タイトルやハッシュタグを見て、気になったものを拾い読みしてもらっても構いません。

そして最後に、掲載されたヒントは、あくまでもヒントであって、正解ではありません。アトリエのあり方はそれぞれ異なります。だから「こうすべきだ！」「こうじゃないといけない！」というルールはありません。このヒント集が、みなさんのアトリエを考えるひとつの材料になれば嬉しいです。

一般財団法人たんぽぽの家

取材にご協力いただいた“オープンアトリエ”

アーピカル☆（大阪市浪速区）
休日の福祉施設を借りて行われている小さなアトリエ活動。個性に寄り添い、可能性を引き出す。

あーと工房みずのみば（堺市）
国際障害者交流センター　ビッグ・アイ運営（主催大阪府）の、障害のある人もない人も参加できる“のんびり”アート教室。

iTohen（大阪市北区）
表現する人のサポートを目的とする本屋とカフェを併設したギャラリー。定期的なデッサン教室など学びの場を開催。

ココルーム（大阪市西成区）
カフェとゲストハウスのふりをした表現と出会いの場。誰でも無料（カンパ歓迎！）で参加できる「釜ヶ崎芸術大学」を主催。

bamboo（奈良県生駒市）
アートスクールを運営するアトリエe.f.t.主催の、表現を軸とした放課後等デイサービス。テーマは全肯定。

アートサポートセンターRAKU（和歌山市）
表現を通して豊かさと可能性の発見を目的とする地域のアート拠点。月1回「アートたいむ」を開催。

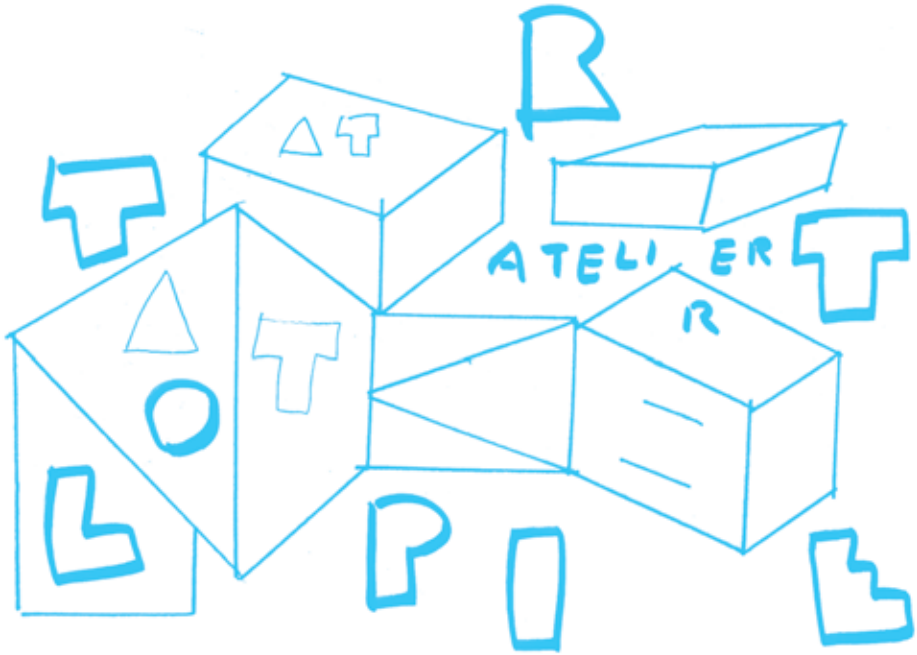
FabCafe Kyoto（京都市下京区）
ものづくりとコラボレーションを生みだすデジタル工作機器を備えたカフェ。独自のノウハウを生かしたプロジェクト支援も。

オープンアトリエ mirumiru（奈良県香芝市）
障害のある人と社会に新しい仕事をつくりだすGood Job! センター香芝が主催するアトリエ活動。

※上記の場や活動は、障害とアートの相談室が「ここってオープンアトリエかも？」と感じ、取材させてもらいました。なので、自らオープンアトリエと名乗っているわけではありません。
※この冊子に掲載したヒントは、障害とアートの相談室が取材を通して独自の視点で拾い上げ、参考になるように編集したものです。複数の取材先での事例が混ざっていたりします。

オープンアトリエのつくりかた

表現の場をひらいてつながるためのヒント集



ヒント
1

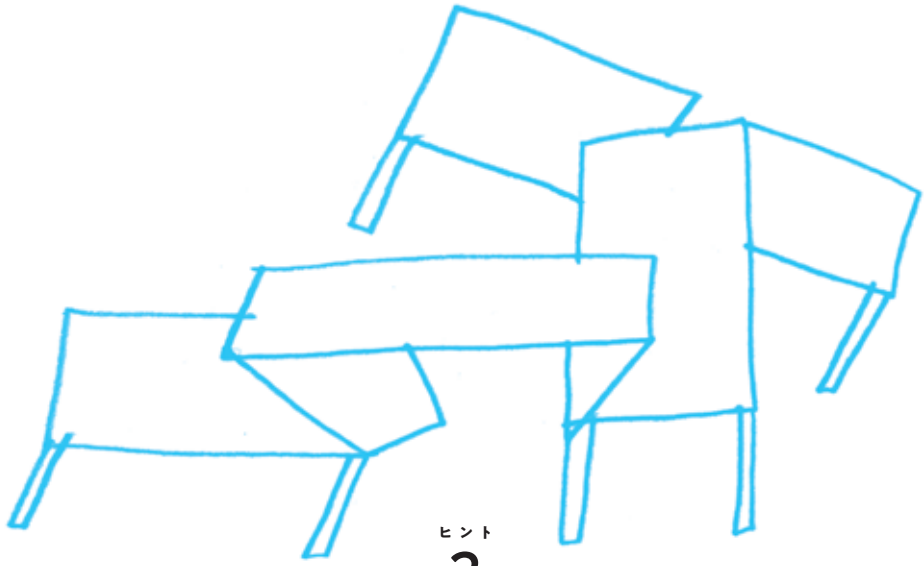
まずは場所、そして時間

オープンアトリエを始めよう！　そう思い立ってまず考えるのは場所のこと。どこでやる？自由に使える場所があればラッキーだけど、実は表現はどこでだってできる。例えば近くの公民館とか、知り合いのカフェとか、公園とか。

いろんな場所が使えるなら、毎回場所と時間を変えて活動するのも楽しそう。だけど参加する人からすれば、確認や調整が必要で大変。逆に、毎回同じ場所に同じ時間で活動できれば、それはイベントではなく日常になる。アトリエでの表現活動が生活の一部になる。

「毎月最後の日曜の午後１時から、駅前の公民館の会議室Ａでアトリエやってます」場所と時間が決まると、オープンアトリエは自然と立ち上がる。

＃アーピカル☆　#RAKU　＃みずのみば　#mirumiru　＃表現したくなる空間

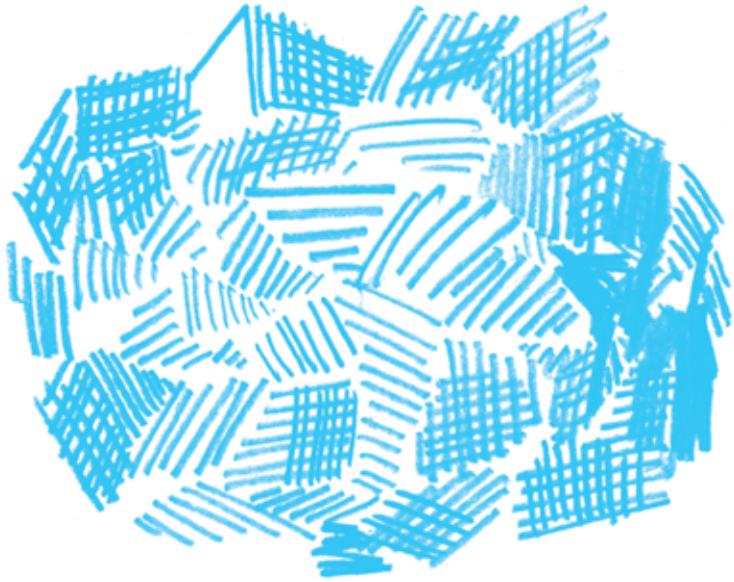


ヒント
2

机の並びとコミュニケーション

絵を描くにも工作をするにも必要な机。机をどう並べるかは、アトリエでのコミュニケーションにすごく影響する。
大きな机をみんなで囲んで使うと、お互いの表情や何をしているかがよく見える。それが刺激になって創作意欲が湧く人もいるし、逆に気が散って落ち着かない人もいるかもしれない。スタッフや講師が参加者とコミュニケーションする時は、後ろに立つか隣に座るかして声をかけることになる。
一方、小さな机が何台かある場合、つなげて大きな一つにしたり、組み合わせていくつかの島にしたり、もちろん一人1台ずつでも使うことができる。一人1台だと、机を揺らすほど力いっぱい絵を描いても、他の人に影響がない。スタッフや講師は机を挟んで正面から参加者に向き合うことができる。あえて無造作に並べれば、ここは自由な場所ですというメッセージにもなる。
それぞれのアトリエにあった机の並びを考えてみてください。

＃アーピカル☆　＃みずのみば　#bamboo　＃表現したくなる空間



ヒント
3

大きなうんこのオブジェ

アトリエをつくるために借りた物件。ガラス張りで景色も最高。スタッフ総出で壁をまっ白く塗ったら、アートでカッコいい空間になった。だけどカッコよすぎて、逆にちょっと緊張する。自由な感じがしない。アートはアートでも、これじゃあアトリエじゃなくギャラリーだ。そこで大きなうんこのオブジェをつくって、窓際の一番目立つところに置いた。よし、これで大丈夫！

ここでは自由に表現してもいいということを伝えるために、空間をあえて整えすぎないこと、カッコよくしすぎないことも大事です。

#bamboo　＃表現したくなる空間

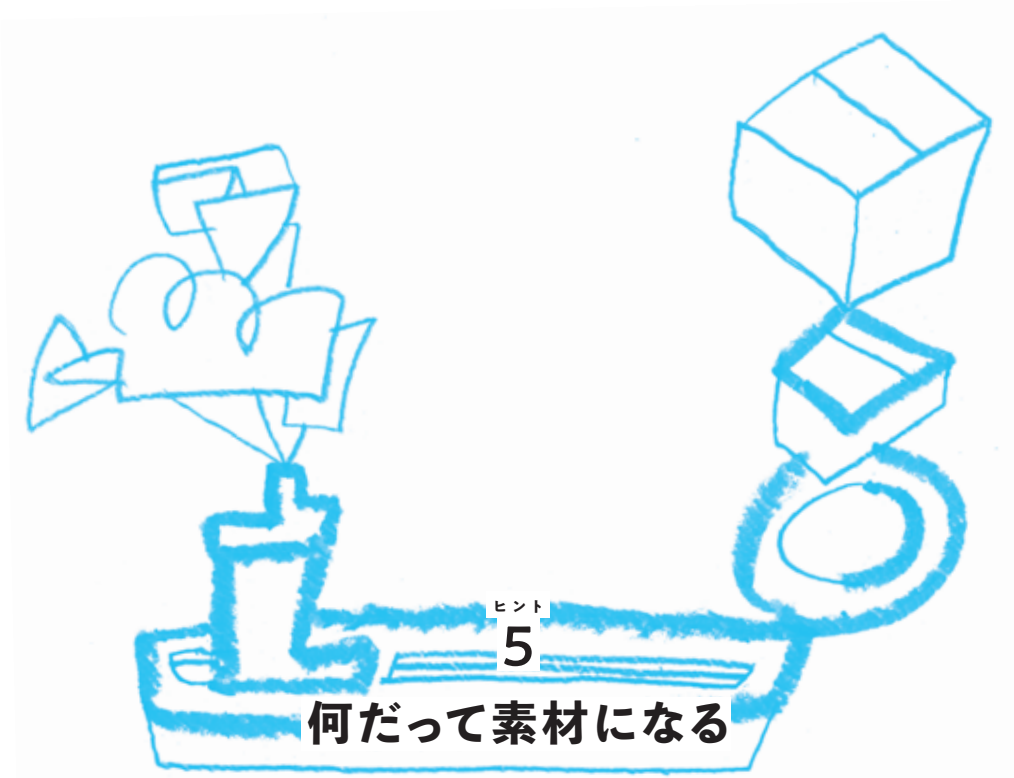
ヒント
4

一人きりになれる空間

感情のコントロールが難しくなったとき、一人になって気持ちを落ち着かせられる空間。いろんな人が一緒に表現を楽しむオープンアトリエにも、そんな空間があったほうが安心だ。周りが気になって創作に集中できなかったり、人には見られたくない秘密の作業をする時にも使える。

一人きりになれる空間は独立した部屋じゃなくてもいい。ロールスクリーンや簡単な仕切りで区切った空間でも、一人用のテントでもOK。もちろん誰でも気軽に使っていい。でも本当に必要な人がいるときには、譲り合いましょう。

＃アーピカル☆　#bamboo　＃表現したくなる空間



ヒント
5 何だって素材になる

表現の素材は、絵の具や粘土など、画材屋さんで売っているものだけじゃない。ダンボール、空き箱、ペットボトル、卵のパック、ガチャのカプセル、手提げホルダー、古着、ジュース瓶の王冠、貝殻、家電から取り出した基盤……なんだって素材になる。そしてそんなふうに思って毎日を過ごしていると、いろんなところでいろんな素材が見つかる。
素材選びのポイント。まずは同じものがたくさんあるということ。素材は並べたり組み合わせたりすることでインスピレーションが湧くので、一つしかなければ面白い表現にはつながりにくい。最低でも50個くらい。あとは手に入りやすさとか、加工のしやすさとか、もちろん安全性とか。時間が経つと劣化したり保存が難しくなったりするものもあるので注意。
ちなみに、空き箱は一度展開して裏返して組み立て直すと、外面が無地になって素材として使いやすくなります。

#bamboo　＃みずのみば　＃道具と材料

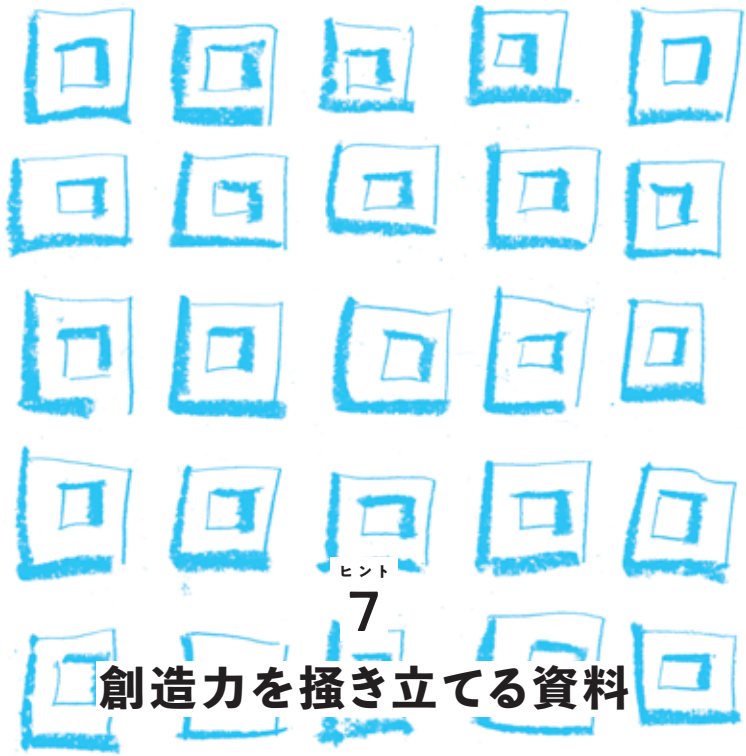
ヒント
6

一人ひとりに合った画材

絵を描くために用いるペンや絵の具、筆、紙などの画材。たくさん種類があって何をどう選べばいいか迷ったら、使う人のことを思い出して、その人に合った画材を考えてみる。例えば描画材だと、力強いタッチでどんどん描き進める人には色むらが少なくすぐ乾くマジックペン、サラサラと紙に触れる感触が好きな人には色鉛筆、しっかりと色を塗りつぶしたい人にはクレヨン、といった具合。いつも画面いっぱいに色を塗る人なら、刷毛やローラーを使ってみるのも面白い。正解があるわけではないけれど、気に入った画材を手にした途端に創作が止まらくなる場合もある。

一人ひとりに合った画材を見つけるのに大事なのは、よく見守ることと、実際にいろいろ試してみること。どの画材を使っているときが楽しそうかよく見つつ、新しい画材にもチャレンジして、その人の内に秘めたエネルギーを引き出す方法を探ってみてください。

＃アーピカル☆　#mirumiru　＃みずのみば　＃道具と材料



ヒント
7
創造力を掻き立てる資料

アーティストのアトリエやクリエイターの作業場には、制作の参考となる興味深い資料がたくさんある。オープンアトリエにも資料があると、創造力が掻き立てられて面白い表現が生まれるきっかけになるかもしれない。

おすすめは、普段は目にすることができないものがたくさん紹介された図鑑や写真集など。不思議なかたちの動物、びっくりするような色の植物、遠い国のユニークな文化や風習、直接は見えない宇宙やミクロの世界……そんなものを紹介する図鑑や写真集は眺めているだけで、普段とは違う感覚が刺激される。もちろん昔の雑誌や料理本、絵本、地図など、どんなものだって創作のヒントになる可能性はあるから、できればいろいろなものを揃えておくほうがいい。

図鑑や写真集は高価なものも多いので、図書館で。館によっては団体貸出の仕組みが使えるので、一度に30冊や50冊の資料がまとめて借りられます。

#アーピカル☆ #RAKU #みずのみば #mirumiru #表現したくなる空間

ヒント
8

汚してもいい環境

絵具が飛んだり、糊がついたり、自由な表現に汚れはつきもの。むしろ汚れることなんか気にしていたら自由な表現なんてできない。そこである程度汚してもいいように環境を整えておく。

例えば、ペン跡が付いてもいい机を準備したり、みんなでお揃いのエプロンを用意したり、机に新聞紙を敷いて養生したり……。よし、これでもう準備万端。どうぞ思い切り汚してください。そう思っても油断は禁物。いつの間にか新聞紙に落描きが始まって、そっちが作品になったりも！

＃アーピカル☆　#bamboo　＃みずのみば　＃表現したくなる空間

インタビュー①

個性に寄り添い、可能性を引き出す

アーピカル☆（大阪市浪速区）

岡﨑 潤さん　アートディレクター

前田美直子さん　アートディレクター

アーピカル☆は大阪市内で2007年から月1回のペースで続く小さなアトリエ。難波の繁華街から少し離れた放課後デイ事業所のスペースを借りて行われている活動に参加するのは、主に知的障害のある人たち。今日も思い思いの絵を描いて楽しんでいます。主催の岡﨑さんと前田さんは、アトリエ立ち上げ時から志を同じくしてきたパートナーです。

――　まずはアーピカル☆を始めたきっかけから。

岡﨑　2005年から大阪市の青少年会館でやっていたバリアフリー絵画教室がはじまり。福祉とアートをつなぐアートサポーターとして活動していた前田さんと僕が講師となってスタートしました。月1×5回の講座だったんですが、想像以上にニーズがあって、結局2年くらいやりましたね。

前田　でも2007年の青少年会館廃止で、事業そのものが終わってしまって。

岡﨑　そうしたら参加者の親御さんたちから、なんとかして続けてほしいと声があがったんです。たった月1回のアトリエのおかげで、子どもたちの生活が穏やかで豊かになる、だからなくなったら困るって。その時点では場所のあても予算のあても何もなかったんですが、僕たちもやりがいを感じていたし、何より参加してくれてた人たちのことが好きになっていた。だから、参加者には参加費を負担してもらい、やれることからやってみましょうと始めました。

――　最初から今のかたちじゃなかった？

岡﨑　当初は公共施設とか個人運営の多目的スペースみたいなところを借りてやってました。でも、いまいち拠点って感じにはならなくって、いろいろ制限もありました。

――　それは制作上の制限？

岡﨑　そうですね。毎回画材などを全部持ってきて全部持って帰るということをやってましたが、それだ

と大きな作品とかはなかなかつくれない。今のスペースを使わせてもらうようになってもう10年くらいになるけど、自由に使えるロッカーがあるので、画材も置いておけるし、描いた絵が乾いてなかったら置いて帰れる。

前田　場所を固定したことで、みんな落ち着いて制作に取り組めるようになりました。

岡﨑　作品を預かれるようになったのは大きいです。前に描いた絵の上から色を塗り重ねるみたいなこともできるし、いい作品が生まれたら公募展に出して多くの人に見てもらうみたいなこともできる。もちろん本人と親御さんの許可をもらってですが、何をどう出すかは基本任せてもらっています。

――　活動を見学させてもらいましたが、参加者がそれぞれ自分の描きたいものに向き合っている様子が印象的でした。

岡﨑　基本、何も教えてないんです。みんな描きたいものをそれぞれ描いてるだけ。僕たちはそれを一緒に楽しんでるっていう感じです。

――　とは言え、表現のためのサポートはいろいろされてましたね。さりげなく違う画材を提案したりとか。

岡﨑　その日の体調や気持ちの乗り方によって、こうした方がより力が発揮できるかも、面白くなるかもって思った時は、アドバイスするんじゃなくて、相談するようにしています。「こんなのもあるけど使ってみる?」とか。

前田　つまり可能性を引き出すということですね。アートの醍醐味は思いもよらない作品が生み出された瞬間の感動にありますし、ひとりでは生み出せないものを生み出せたという経験は、表現する人にとっても講師にとっても嬉しいことです。

――　アトリエとして作品発表の機会をつくることはありますか。

岡﨑　展覧会は過去に2回やりました。ただお金的にも労力的にも負担が大きいので、やれるならやりたいけど、そんなに積極的というわけでもないです。そのかわりに年に1度、アトリエに家族やヘルパーさん、アトリエに興味を持ってくれそうなゲストなんかを招いてアートサロンを開催しています。みんなで食べ物を持ち寄って、作品を紹介しながら、感想を言い合ったり、おしゃべりをしたり。やっぱり作品を見てもらうと、みんなも僕たちも嬉しいですから。

アーピカル☆

大阪市浪速区（※住所非公開）

instagram.com/arpikal.star/

インタビュー②

基本は全肯定
やりたいを見つけるサポート

bamboo（奈良県生駒市）

吉田田タカシさん
アトリエe.f.t.代表

モットーは「つくるを通していきるを学ぶ」。子どもから大人まで幅広い層を対象にアートスクールを展開するアトリエe.f.t.。その生駒校で週4日行われている放課後等デイサービスbambooは、主に発達障害を持つ子どもたちが型破りな個性を発揮するアトリエ活動です。

―― アトリエe.f.t.はもともと大阪が拠点ですよね。生駒校の立ち上げ、そしてbambooを始めた経緯から。

吉田田 きっかけは僕自身が生駒に引っ越したことです。知人から生駒はクリエイティブなことを学べる場所が少ないと聞いて、じゃあやろうって子どものアトリエを始めました。すると、発達障害のある子どもが何人か通ってくるようになって、みんなすごく才能があることに気づかされました。社会的には障害と言われている特性が、アトリエでは魅力的な特性になる。そういった子どもを対象としたワークショップを継続的にできる方法はないかと探していて、放課後デイという仕組みがあることを知りました。これを使えば親御さんの負担も少なくなるし、みんなハッピーだ！って。

―― 以前は発達障害の子どもの受け入れをしていなかった？

吉田田 経験はありました。ただ僕は福祉の専門家ではないので、肌感覚でこの子だったらやっていけそうだなと思う子どもだけでした。

―― 今日、実際の活動を見学させてもらいましたが、それぞれが自分の関心に引き寄せ、自由に創作を楽しんでいる印象を持ちました。

吉田田 基本全肯定というか、できないことをできるようにしようとか、苦手を得意に変えようとか、思ってないんです。代わりに本人が好きなことややりた

いことを見つける手伝いをしたい。好きなことが見つかれば、それをきっかけに表現することが楽しくなったり、みんなと関わったりできるようになる。

―― やりたいことを見つける手伝いとは具体的にはどういうことですか。

吉田田　まずは気長に待つこと、そして自分自身の視点を変えることですね。例えば、アトリエの外で蜘蛛の巣を取ろうとしている子どもがいたら、つい「いいから中に入って、一緒にやろう」って言いたくなる。だけど、そのままにしておくと、蜘蛛の巣を取る道具をつくり始めたりする。「おっ、表現始まった！」と捉えてあげることができたら最高です。

―― 今日のプログラムは「〇〇〇なお弁当をつくろう」でしたが、あれは吉田田さんが考えた？

吉田田　スタッフですね。スタッフと案を出し合って考えます。いちおう偏りがないように細かい工夫はしているんですけど、基本は子どもが好きなことや、やってみたいことをプログラムにしています。いたずらとか、大人を驚かすとか、イマドキの子だったらYouTubeとか、アニメとか、ゲームとか。自分たちが子どもの頃にやりたかったことをプログラムにすることもあります。

―― あと、活動の最後にその日の作品を発表し合う時間がありましたね。

吉田田　発表の機会があることは、こだわりを持ってつくる動機になるし、直後ならつくったプロセスも込みで共有できます。完成した作品よりプロセスを大事にしたい。だから展覧会をしたりすることにはあまり積極的じゃないですね。それでも圧倒的な作品が生まれたときには、多くの人に見てもらいたいというジレンマはあります。

―― 放課後等デイサービスのことを。福祉の仕組みを使うことにで変化したことはありますか？

吉田田　事務的なことが大変だけど、基本的にやってることは変わらないですね。福祉の仕組みは使っていますが、あんまり福祉のつもりでやってないです。もちろん福祉として大切な部分は残しながら、デザインやアートの視点から変えてもいいと思う部分は積極的に変えていくようにしています。福祉の現場を長く経験してきたスタッフもいるので、一緒に話し合ってbambooらしいかたちを探すことはとても楽しいです。例えば、福祉で使われる「利用者さん」っていう言葉に違和感があるから、もっとフラットでフレンドリーな呼び名を考えようとか。

―― どう呼んでいるんですか？

吉田田　メンバー。あ、僕バンドやってるんで。

放課後等デイサービス bamboo
（アトリエ e.f.t. 生駒校）

奈良県生駒市壱分町 763-3
06-6764-6086
eftosaka.com/bamboo.html

ヒント
9

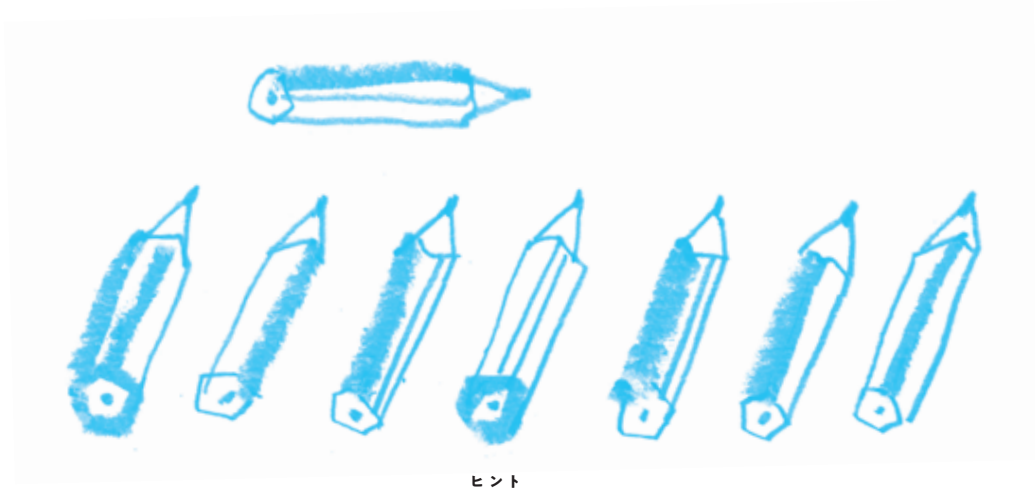
見守っているだけでもいい

オープンアトリエを始めるにあたって気がかりなのは、表現に関するサポートのこと。アートの勉強をしたわけでもないし、特別な技術やセンスがあるわけでもないから、何をどうサポートすればいいのかわからない。大丈夫。何も言わずに、創作の様子を見守っているだけでも立派なサポートになる。

大事なのは参加者が安心して表現を楽しめるための関係をつくること。見守ることで参加者には、ここでは自由に表現していいんだ、自分を出していいんだ、ということが伝わる。むしろ聞かれてもいないのに無理に感想を言ったり、評価をしたりしないほうがいい。

ただし、ぼんやり眺めているだけはダメ。参加者一人ひとりがちゃんと自分らしく表現できているかよく観察しましょう。もし自分のペースで創作ができていなかったり、周りに合わせてやりたくないことをやっているような人がいたら、リラックスさせる他愛もない声掛けを。

#アーピカル☆ #RAKU #みずのみば #mirumiru #創作のサポート



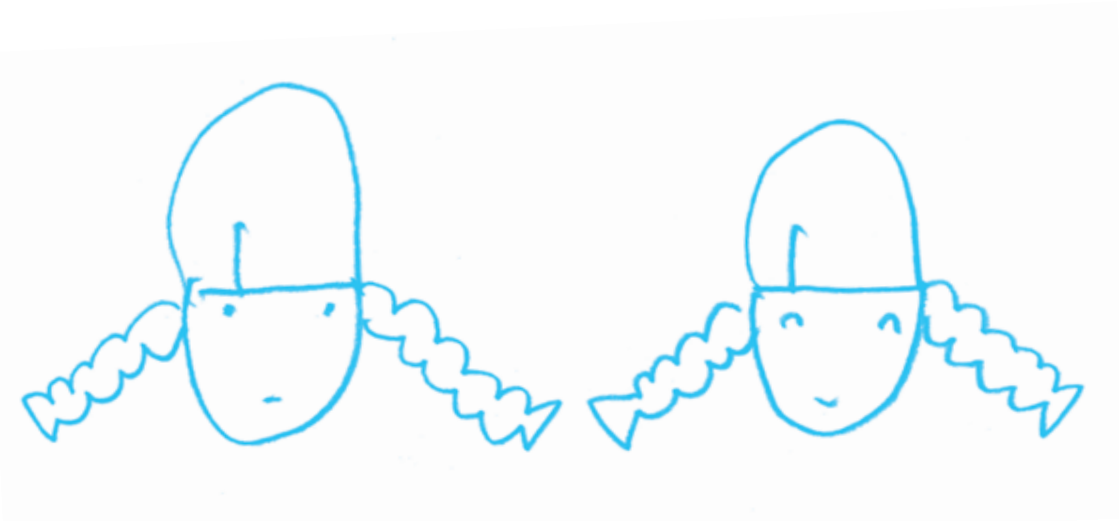
ヒント
10

色鉛筆の渡し合いっこ

1　なかなか絵を描き始められない人のところに、紙と色鉛筆を持って、前にそっと座る。
2　気持ちを寄り添わせながら、紙に色鉛筆で線や丸など簡単なかたちを描く。最初は小さく。
3　描き終わったら相手に色鉛筆を渡して「何か描いて」とお願いする。
4　相手が何か描いたら、色鉛筆を受け取って、また何か描く。
5　3→4を繰り返す。相手が描いたものを面白がったり褒めたりしながら、絵を大きくするなど発展させていく。

誰だって最初のひと描きはすごく緊張する。それが慣れない環境だったり、慣れない人とだったら、なおのこと。だからまずは画材を使った簡単な遊びで体と心を慣らしていく。色鉛筆を渡し合う中で講師やスタッフとの小さな信頼関係を育んでいく。それと同時に、画材や、描くことにそのものに慣れていく。
もちろんクレヨン、サインペンなど、他の画材でもOK。途中で色を変えたりしても面白いかも。

#アーピカル☆　#創作のサポート



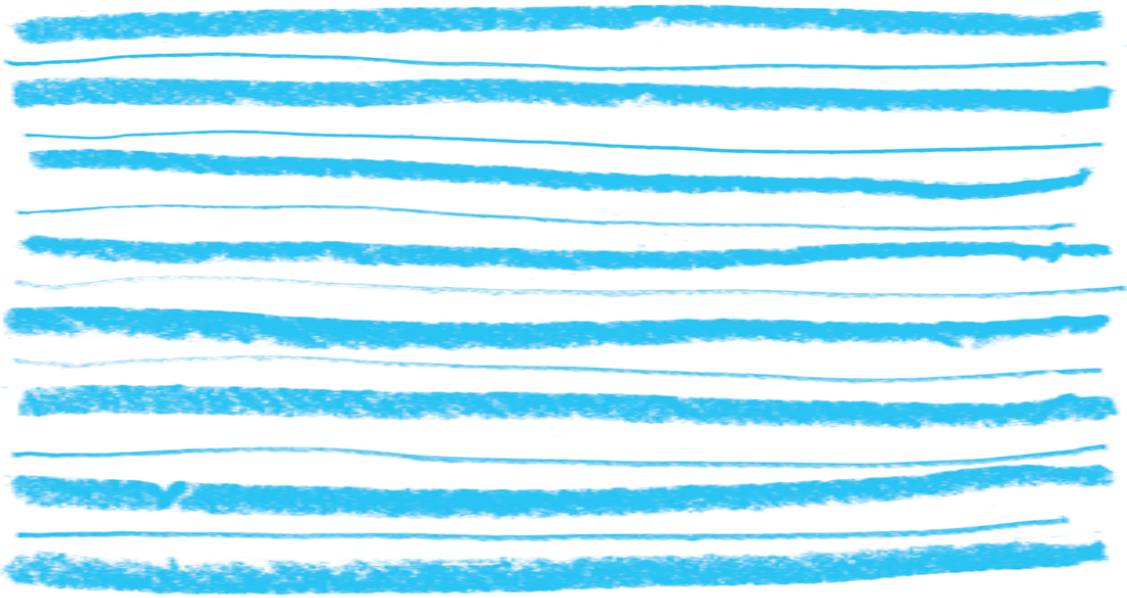
ヒント
11

表情や体の動きに目を向ける

創作のサポートをする上で、作品をよく見ることはとても大事。ただ作品だけに注目してしまうと、その人が本当にやりたいことや表現したいものを見落としてしまうことがある。そこで、つくっている人の表情や体の動きにも目を向け、小さな特徴や変化からサポートのヒントを見つける。

○○さんはバナナ描いてる時が一番いい表情。バナナ好き？　それとも黄色好き？　△△さんはいつも腕のストロークが滑らかなのに今日はぎくしゃく。もしかして体調がすぐれない？　それとも画材があってない？　□□さんは体全体を使って絵を描く。実は体を動かすのが気持ちよくて描いてるのかも？

＃アーピカル☆　＃みずのみば　＃創作のサポート



ヒント
12

必要なサポートを聞いておく

車いすの人も、目が見えにくい人も、耳が聞こえにくい人も、駅からの道順が分からない人も、オープンアトリエなんだから、できる限りどんな障害のある人も受け入れたい。だったら、できれば事前に必要なサポートを聞いておいたほうがいい。もちろん来てもらってから一緒にサポートを考えてもいいけれど、わかっていれば心構えもできるし必要な準備もできる。また参加者募集に「サポートが必要な方はご相談ください」と一言添えてあるだけで、「自分も行ってみようかな」と思える人がいるかもしれない。
どうしてもサポートしきれない部分がある場合は、専門家に相談したり、ときには「ご自身でご準備いただけますか?」と正直に伝えることも大切です。

#mirumiru　#みずのみば　#創作のサポート

ヒント
13
タイムテーブルを決める

一人ひとりが自分のペースでそれぞれの表現に取り組めるオープンアトリエ。でも、あんまり自由すぎると不安になってしまったり、モチベーションが上がりにくい人もいる。そこで、その日の活動のざっくりとしたタイムテーブルを決めておく。

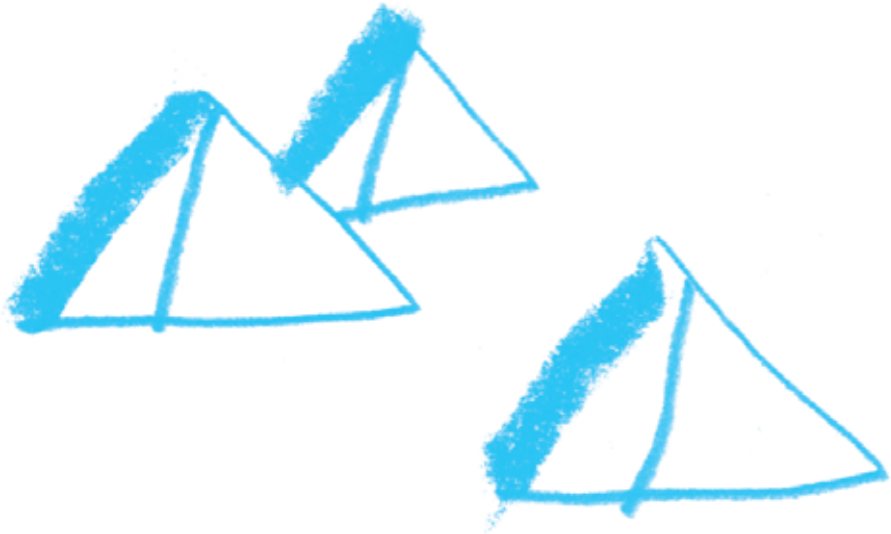
（例）

14:00〜15:30 そうさく → 15:30〜16:00 かたづけ → 16:00〜16:30 はっぴょう → おわり

※時間は余裕を持って設定しましょう。

タイムテーブルは、最初に口頭で伝えておくか、大きく紙に書いて見やすいところに貼っておくと、「今日中に頑張ってしあげよう」とか「キリが悪いからこの辺で切りあげよう」とか、それぞれ創作の見通しを立てやすくなる。
ちなみに、忘れがちなのは後片付けの時間。作品をしまったり、パレットや手を洗ったり、机を並べ直したり、意外と時間がかかります。

#bamboo　#mirumiru　#ココルーム　#プログラム

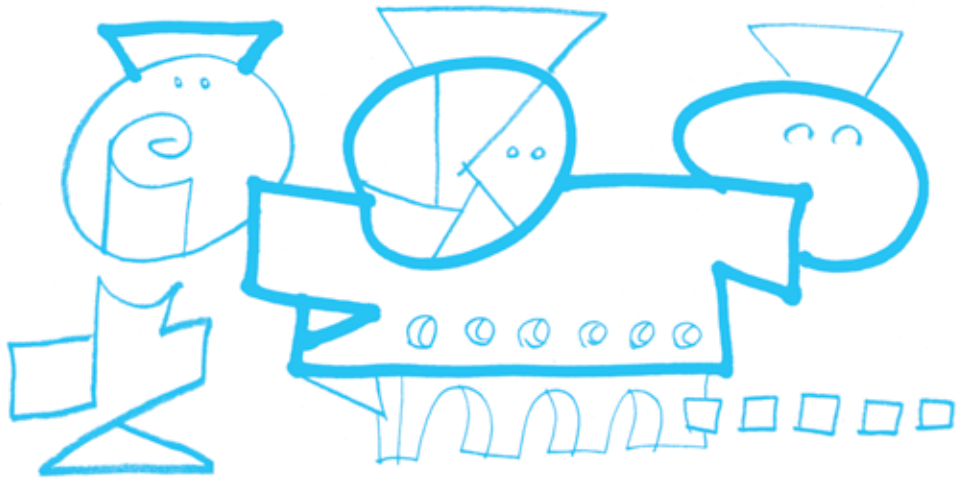


ヒント
14

小さな遊びを用意する

紙と画材を渡されて「好きなものを描いてください」と言われても、なかなか描けない人もいる。そういうときは、誰もが気軽に取り組めて最終的に何かが出来上がる遊びが用意されているといい。例えば、塗り絵とか、折り紙とか。見本を参考に季節のちぎり絵をつくったりするのもいいし、楽しみながらできるDIYのようなことでもいい。
それって施設のレクリエーションとどう違う？　たぶん同じです。でも、実際に手を動かして何かをつくるのは楽しいし、出来上がると嬉しい。自分らしく表現するための練習にもなる。そして何より、誰でもアトリエにいてもいい理由になる。
自分の描きたいものや表現したいものに打ち込む人の隣で、リラックスしながら遊びを楽しむ人がいる。とてもオープンアトリエらしい風景です。

#RAKU　#プログラム



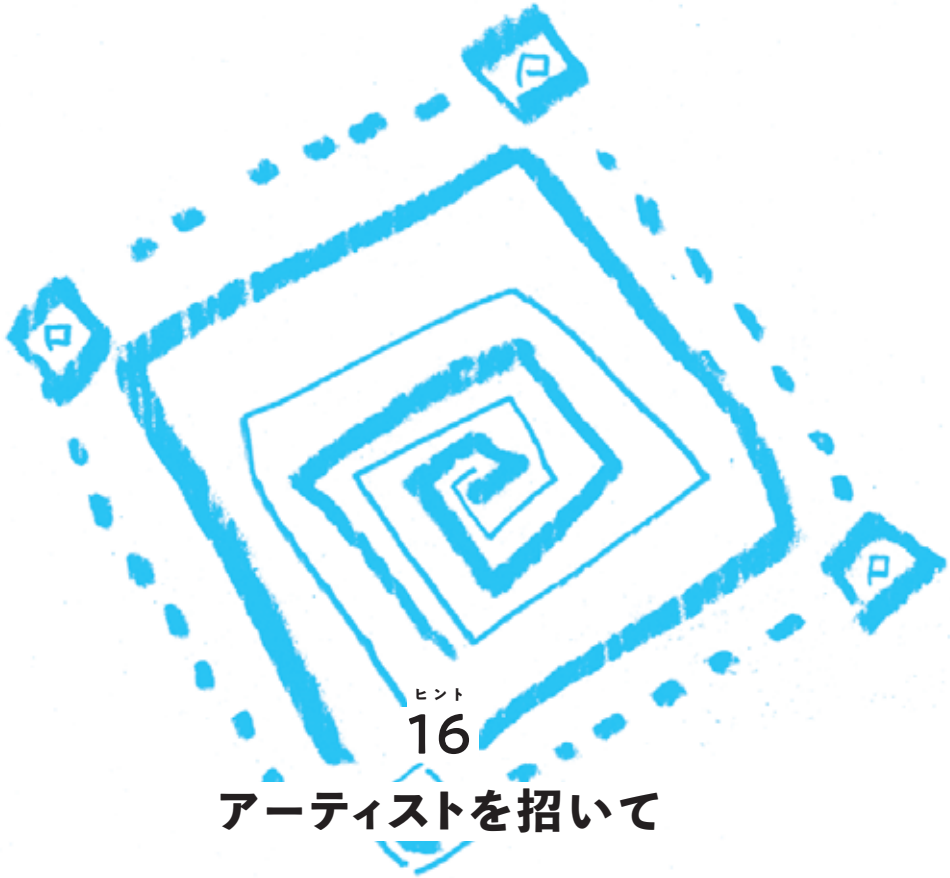
ヒント
15
「やってみたい」をプログラムにする

クリエイティブな時間が過ごせるプログラムを考えて、参加者と一緒に楽しみたい。でも、自分は表現の専門家じゃないからプログラムなんてつくれないし思いもつかない。大丈夫。誰かがやってみたいことや、やったら楽しそうだなと考えていることをみんなでやってみると、それはだいたい素敵なプログラムになる。

例えば「秘密基地をつくる」とか「巨大迷路をつくろう」とか。つくり方や完成形が決まっていないもののほうが、思い通りにできなかったり、予想と違うものができたりしていい。工夫も生まれるし、完成しなくてもクリエイティブな経験になる。大切なのは準備。いろんな可能性をイメージして、必要になりそうなものはもちろん、必要じゃなさそうなものも揃えておく。そして誰もがワクワクしてやってみたくなるようなタイトルをつける。

もちろん「やってみたい」は、参加者がやってみたいことでも、あなたがやってみたいことでもOK。

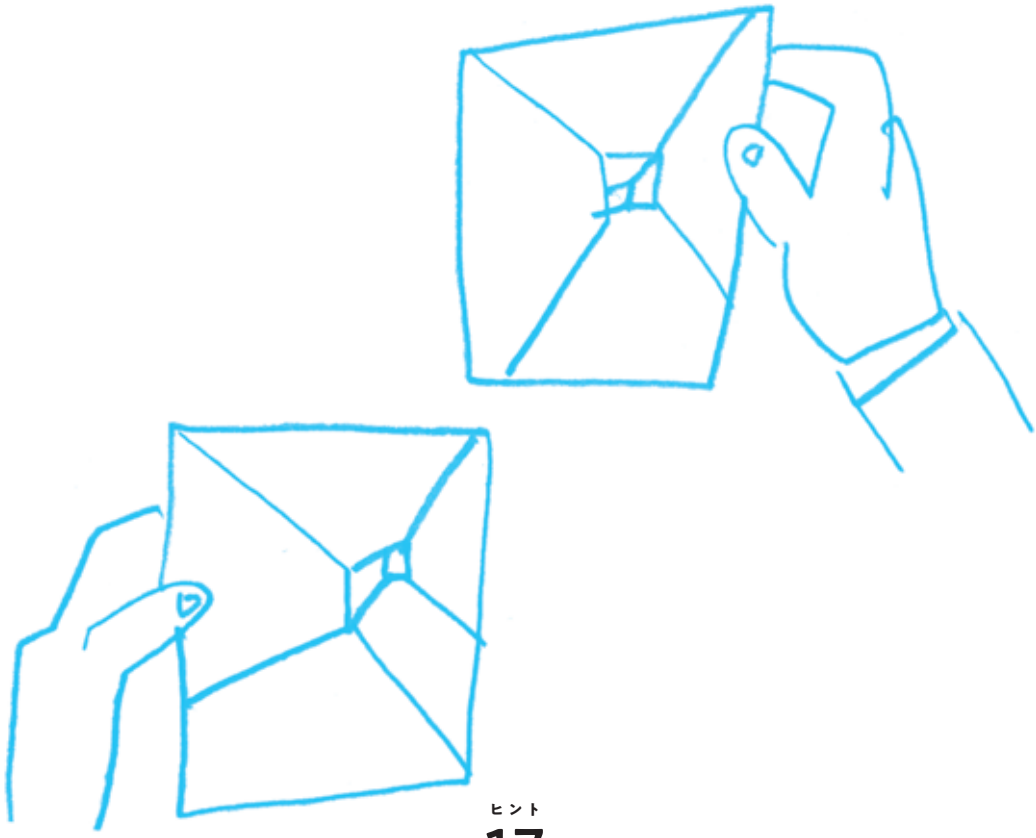
#bamboo　#みずのみば　#ココルーム　#プログラム



ヒント
16
アーティストを招いて

いろんな表現にチャレンジできるオープンアトリエ。でも、自分たちだけでプログラムを考えていると、ネタ切れしたり、行き詰ったりしてしまうことも。そんな時にはアーティストをゲストに招き、普段とは一味違うワークショップをやってみる。
アーティストから作品の話を聞いたり一緒に創作したりすることで、「こんなアートがあるんだ」「こんな素材が使えるんだ」といった発見や、「私もこんなことやってみたい！」といったモチベーションにつながり、アトリエが変わっていくきっかけになる。
また、ときにはアートではなく、音楽やダンス、ゲームや料理など、異なるジャンルのゲストを招いても面白い。
日々のアトリエのスパイスとなるゲスト。どんな刺激があれば面白くなるか考えてみよう。

#RAKU　#ココルーム　#プログラム



ヒント
17

合作俳句

合作俳句は、5・7・5をそれぞれ別の人が考える俳句のつくり方。上の句や中の句の音やイメージを受けて考えてもいいし、ただ好きな言葉をそのまま書いてもいい。できあがった俳句には、一人では絶対思いつかないような斬新さや面白さがある。
一人で表現するには少し勇気がいる。でもみんなで一つの作品をつくるなら、気楽に表現できるかもしれない。もちろん俳句じゃなくても、複数人で1枚の絵を描いたり、立体をつくってみたり。他の人の表現を尊重しながら、コミュニケーションを楽しもう。

＃ココルーム　＃プログラム

インタビュー③

みんなにとって居心地の良い表現できる居場所

あーと工房みずのみば（堺市）

鈴木京子さん
ビッグ・アイ事業プロデューサー

水野浩世さん
美術家／みずのみば講師

あーと工房みずのみばは、堺市にあるビッグ・アイ（国際障害者交流センター）が大阪府主催のもと定期的に実施しているアトリエ活動。障害のある人もない人も参加できて、時間内であればいつ来てもいつ帰ってもいい。それぞれが自分がやりたい創作活動に自由に取り組みます。お茶とお菓子とアートがある、まるで大きなリビングのような空間です。

―― みずのみばがスタートした経緯から。

鈴木 そもそもビッグ・アイは、障害のある人も参加できる表現の場をつくることを目的としています。舞台芸術、音楽、演劇についてはオープン当初から取り組んできましたが、美術分野は定期的な場がなかった。そんな中、水野さんから相談があって、これを機会に始めましょうということになりました。

水野 最初のきっかけはビッグ・アイ主催のアートキャンプという、障害のある人とない人が共同でアートをつくるというイベントです。私は講師として参加させてもらっていたんですが、参加者も講師もボランティアも立場を超えてみんな一緒に楽しんでいて、その感じがすごくよかった。それでここで絵画教室できませんかと声をかけさせてもらいました。

―― 今日、活動を見学させてもらいましたが、絵を描いている人がいて、粘土をしている人がいて、その横で講師も何かつくっていたり、ヘルパーさん同士はおしゃべりをしていたり。それぞれが楽しく過ごされていましたね。

鈴木 ここは表現をすることを最優先に考えていないんです。障害のある人が土日にでかけられる場所が少ない現状の中で、まずは居場所として成立させたい。その上で、講師の方がいろいろな工夫をされることで、表現することにつながっていけばという考えです。

水野 表現すること以前に、その時間を楽しむとい

うことがここでは認められているのは大きいです。講師としても、結果ではなく過程の豊かさを大切にできる。逆に作品で賞をとることや展覧会をすることを求められてしまったら、今ほどみんなにとって居心地のいい場所にはなっていなかっただろうと思います。

―― 居心地の良さが、表現することにもつながっている？

水野 そうですね。居心地がいいからこそ、一人ひとりがやりたい表現を楽しめるという環境になっていると思います。

鈴木 楽しんでいると、それが他の人にも伝染していくんです。楽しそうに粘土をしている人がいたら、それを見ている私もやってみたくなる。そういう空間になっていくのがいいと思います。

―― 印象的だったのは、参加者がそれぞれ持ってきたお菓子を配り合っていたこと。別に直接おしゃべりしたりするわけじゃないけど、ちゃんと交流があるんだなと感じました。

水野 もともとは運営側でお菓子を用意してもらっていたんですが、コロナでそれができなくなったので、代わりに各自持って来るようになりました。ありがとうと言われると嬉しいし、お互いの名前を覚えるきっかけにもなってます。お菓子は大事なコミュニケーションのアイテムですね。

鈴木 創作はそれぞれの活動ですが、同じ時間と場を共有することで目には見えない交流が生まれています。例えば、人が多いのは苦手だと思っていた参加者が、ある日突然「今日は人が少なくて寂しいね」と言ったりする。つくることだけではなくて、人と会うことも楽しみにしていることに気づかされました。

―― 意識的に交流のきっかけをつくることはありますか？

鈴木 みんなでクリスマス会をやったり、一人１枚年賀状を描いて交換したりといったことは時々しています。行事的に一緒に何かをする機会をつくることが、つながるきっかけになっていると思います。

―― これから表現の場をつくろうとしている人に向けてアドバイスを。

鈴木 ビッグ・アイは福祉団体とのつながりもあるので、参加者への情報発信をする上でお力になれることもあると思います。それとは別に必要なのはアーティストといかにつながるかということ。隣で絵を描くことはできても、アーティストのように表現を引き出すようなことは難しいという場合もあると思います。福祉の中だけでは実現できないことなので、やはりアーティストだったり、アート団体とつながることを目指すことも大切だと思います。

あーと工房みずのみば
（国際障害者交流センター　ビッグ・アイ）

大阪府堺市南区茶山台 1-8-1
072-290-0962
www.big-i.jp

インタビュー④

表現の楽しみがある居場所

アートサポートセンター RAKU（和歌山市）

島 久美子さん

共助のまちづくり協会

JR和歌山駅前、商店と多くの福祉事業所やNPOが軒を並べる、みその商店街。その一角にあるアートサポートセンターRAKUは、表現を通して一人ひとりの豊かさと可能性を発見することを目的とした地域のアート拠点。ここで毎月最後の日曜に行われている「アートたいむ」は、障害の有無に関わらず誰でも表現を楽しむことができるアトリエ活動です。

―― 駅から歩いて3分、アーケードの角地、大きな窓があって外の様子もわかる。すごくいい場所ですね。

島 建物自体は一麦会（麦の郷）という社会福祉法人が借りていて、その1階部分を地域貢献を目的としたコラボというかたちで提供してもらっています。

―― ここ、みその商店街は2011年の「ひと・アート・まち*」の会場になっていて、島さんも運営に参加されていましたね。そしてその翌年にRAKUがスタート。

島 「ひと・アート・まち」で作品展を企画したら予想以上に作品が寄せられて、いよいよ和歌山でも日常的に誰もが表現できる場が欲しいと思うようになりました。そこでどこから始めようと考えたとき、私としては「そこへ行けば表現の楽しみがある」という居場所のイメージもあったので、機会じゃなくて場所をつくろうと思いました。ただ、費用的なことを考えると自力は難しかったので、麦の郷にコラボの話を持ちかけました。

―― 月1回の「アートたいむ」は始めてどれくらい？

島 2014年からだからもう7年になります。きっかけは絵を描くのが好きなある男の子。その子が通う学校の先生が、卒業後も絵を描く機会をつくってあげたいと相談に来て、じゃあやりましょうということになりました。その男の子は今もよく参加してくれていて、彼のようにずっと来ている人もいれば、途中で

来なくなった人もいます。

―― 今日のアートたいむの参加者は7人。描きたいものを描く人と用意されたプログラムに取り組む人が一緒に表現を楽しんでいる様子が印象的でした。

島 プログラムがあることで誰でもそこにいる理由になるし、さらにそこにちょっとした達成感や満足感があるのは、その人の一日の中で確実に嬉しい出来事になります。実は絵を描くことはそれほどに好きじゃないけど、プログラムが楽しみで毎回参加する人もいます。

―― もう一つ印象的だったのは、ずっと誰かのしゃべり声が聞こえること。島さんが参加者に話しかけていたり、参加者同士がおしゃべりしていたり。アトリエとしての横のつながりを感じました。

島 いわゆる絵画教室だったら描くことに集中しましょうとなるけど、ここは参加する人にとって居心地のいい時間と空間でありたいと思っているので、おしゃべりは大歓迎。障害のある人は年齢が離れている人や違う作業所に通う人とコミュニケーションをとる機会自体も少ないので、むしろおしゃべりが生まれるよう積極的に声をかけています。ただおしゃべりメインになりそうなときは「ちょっと集中しようか」と声をかけたりもします。

―― 表現する場であり居場所でもあるという考えがいろんなかたちで現れていますね。

島 私はここが一人ひとりの心が嬉しくなってプライドがちょっと膨らむような場になるのがいいと思うし、表現ってそういうことじゃないかなと考えています。そこにつながっていてこそ表現活動だし、それによってその人の人生がより楽しくなればいいというのが一番のねらいですね。

―― 最後にこれからアトリエを始めようとしている人にアドバイスを。

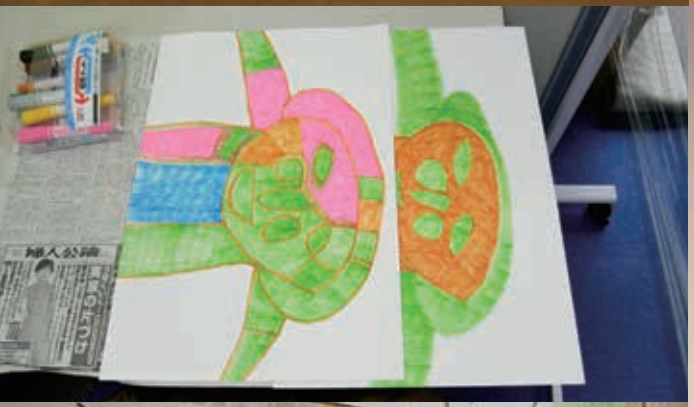
島 障害のある人が関わること、そして継続することを前提に考えるなら、とにかくややこしくせず、できるだけシンプルにすることが大事ですね。例えば、毎月最後の日曜日の1時半から3時半、みその商店街のRAKUに来ると、そこに安心できるスタッフや仲間がいて、表現を楽しめる。毎回時間が変わったり場所が変わったりするだけで、それがハードルになる人もいます。また運営の方法や準備もなるべくシンプルにしたほうが、主催する人やスタッフの負担が少なくて、結果的に継続につながっていくと思います。あとは、ねらいをどこに持つか、始める前にある程度整理しておくのがいいと思います。それによって、自然と決まってくることも多いですから。

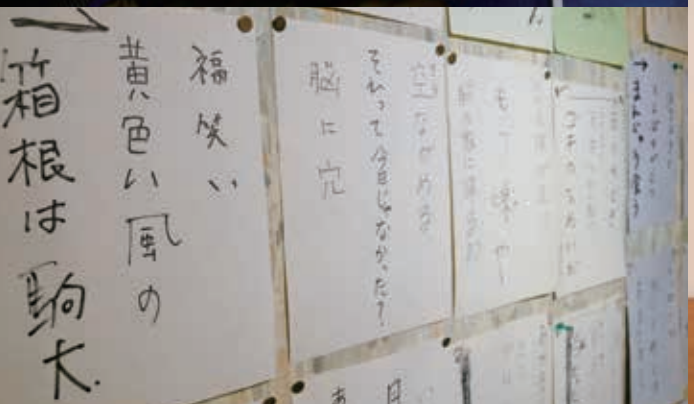
*近畿労働金庫と一般財団法人たんぽぽの家によるアートプロジェクト。2000 ～ 2018年にかけて近畿2府4県を巡回し、地域の障害のある人の表現と、市民やまちづくり団体をつなげる活動を実施した。

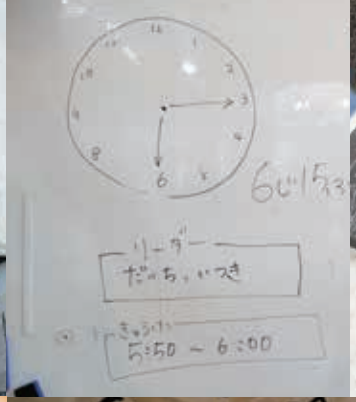
アートサポートセンターRAKU

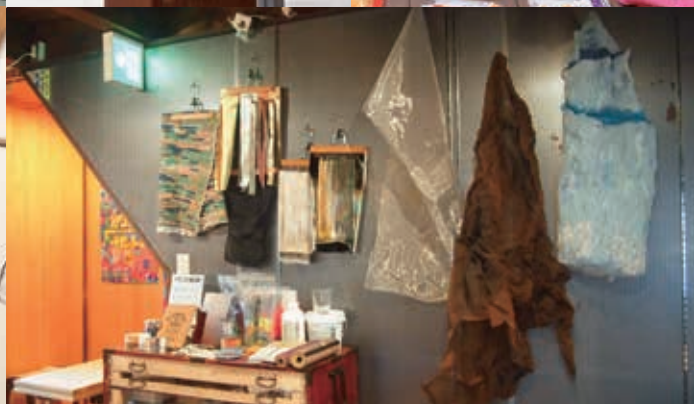
和歌山市美園町 5丁目5-3
073-427-3316
www.facebook.com/wakayamaraku/
主催：共助のまちづくり協会

Asahi
生
500ml




福笑い
黄色い風の
竹相根は駒大


リーダー
だいちゃいつき
5:50 ~ 6:00



ヒント
18

みんなの居場所

オープンアトリエは、自由に表現する場であると同時に、自由な自分でいられる居場所にもなる。表現を認め合える仲間やスタッフが集っているからこそ、そこでは普段とちょっと違う自分でいられる。ありのままの自分を表現できる。
自由な自分でいられる居場所は、もちろん自由な方がいい。時間内ならいつ来てもいいし、いつ帰ってもいい。創作の気分が乗らなければ、ただのんびり過ごしたっていい。もちろんお茶を飲んだってお菓子を食べたっていい。手の空いている参加者やスタッフとおしゃべりしてもいい。他の参加者の顔を見るために一瞬立ち寄るだけでもいい。
そういうことも全部ひっくるめて受け止めるおおらかさのある場所は、きっとみんなにとって心地の良い居場所になるはず。

＃みずのみば　＃自由な居場所

ヒント
19

名前だって表現だ

アトリエでは参加者もスタッフも、ここにいる人たちに呼んでほしい名前で呼び合う。もちろん本名でもあだ名でもいい。今まで呼ばれたことのない名前でもいいし、今日1日限定の名前だっていい。アーティストもミュージシャンも、表現する自分を表す名前を持っている。名前だって表現の一部。ならば、表現の場であるアトリエでは、自分の名前を自由に決めたっていい。

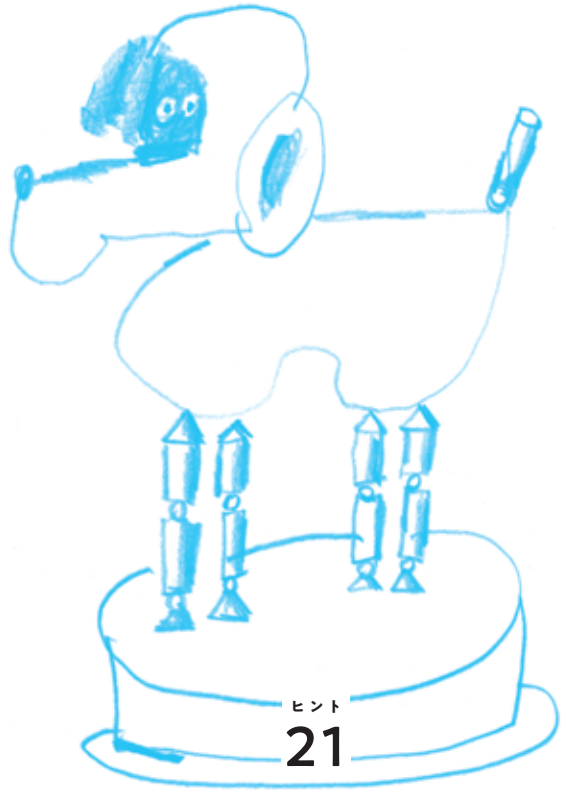
呼んでほしい名前で呼び合うと関係性が変わる。呼ぶ人は、名前からその人が好きなものやなりたいもの、その日の気分などを想像する。呼ばれる人は、普段とは少し違う自分になれる。名前を呼び合うこと自体がちょっとした遊びになる。そして気がつけば、互いの表現を認め合える空気になっているかも。

#bamboo　＃ココルーム　＃自由な居場所

ヒント
20
みんなの作品置き場

アトリエで生まれた作品は、つくった人が持って帰るのが基本。でもまだつくりかけだったり、家に持って帰ってもいろんな理由で保管が難しい場合、アトリエに作品置き場があるといい。
棚の大きさにもよるけれど、作品をためていけると、そこから見えることやできることが増える。ある人の作品を時系列に並べて成長や変化を確認することができる。途中で飽きてしまった作品をまたつくり始めたり、完成したはずの作品に手を加えたりもできる。また展覧会などのお披露目もやりやすくなる。
作品保管の注意点。作者と制作日、タイトルがある場合はタイトルを記録しておきましょう。

#アーピカル☆　#みずのみば　#ココルーム　#自由な居場所

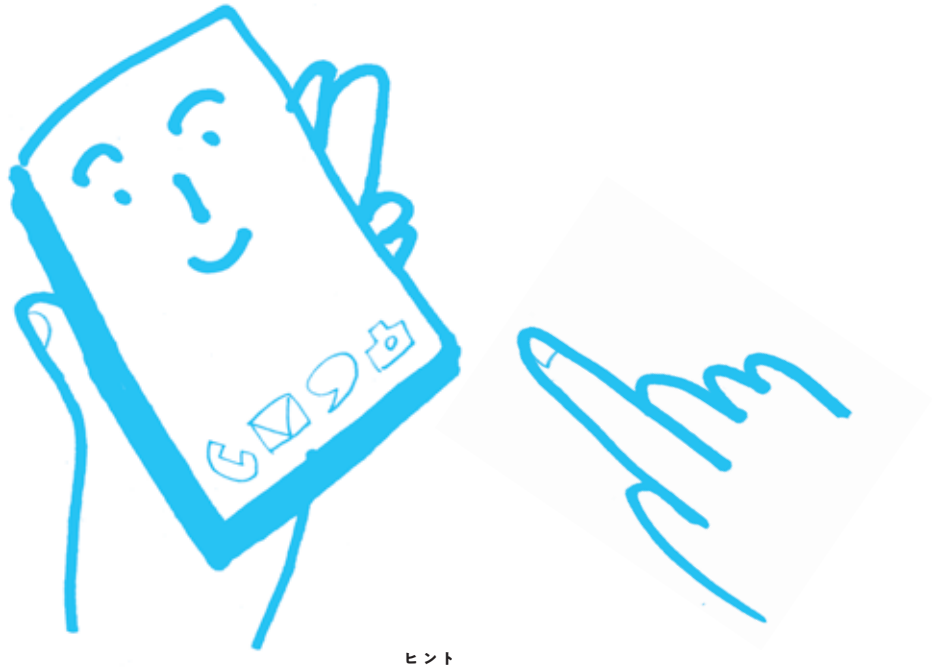


ヒント
21

スタッフだって表現したい

画材や素材を準備したり、それぞれの様子を見て声をかけたり、活動中はなにかと忙しいスタッフ。でも参加者が表現を楽しんでいる様子を見て「自分も何かつくりたいな」と思ったら、迷わずやりましょう。
オープンアトリエは、誰もが自由に自分らしく表現する場。それはスタッフだって例外じゃない。スタッフがただサポートするだけの人になってしまったら、それはオープンアトリエじゃなくなってしまう。逆にスタッフが誰よりも表現を楽しんでいたら、アトリエ全体の創作意欲も刺激される。
もちろん必要な目くばりはしながら、どうぞ夢中になりすぎないように。

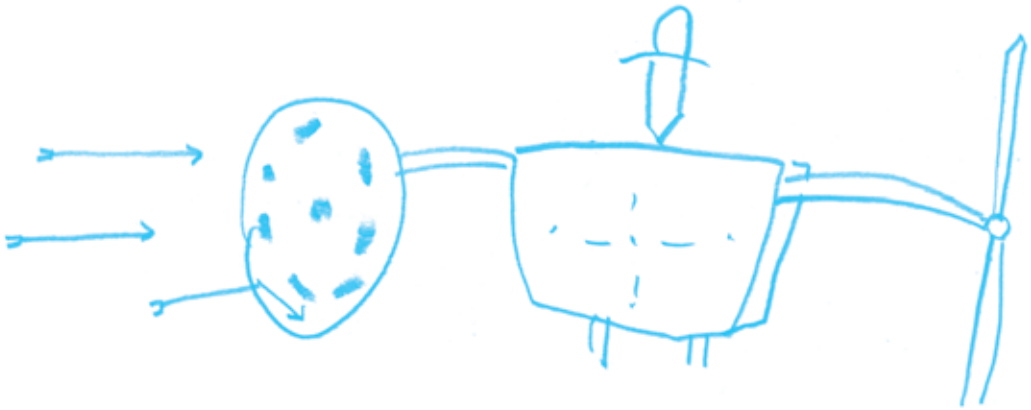
#ココルーム　#みずのみば　#自由な居場所



ヒント
22
スマホも表現の道具

みんなが集まって実際に手を動かし素材を感じながら行うアトリエ活動と、一人で小さな画面と向き合うスマホは、なんとなく似合わない気がする。でも、つくりたいものを検索して形や色を確認したり、自分で撮り溜めた写真を見ながら創作のアイデアを考えることはある。動画編集などスマホをつかってこそ可能になる表現だってあるし、何より自分の作品をSNSを通じて発表したりもできる。スマホなどの情報端末はいまや普通の道具。図鑑や色鉛筆と変わらない。ならばむしろ持ってない人のために誰でも使える1台を用意したり、障害があって使えない人の代わりに操作してあげたりするほうがいい。アトリエで端末を用意するなら、ネットにつながった、画面が大きくて頑丈なタブレットがおすすめ。

#bamboo　#RAKU　#アーピカル☆　#自由な居場所



ヒント
23
誰かを傷つけるかもしれない表現のこと

オープンアトリエは誰もが自由に表現できる場。ただ、自由だからと言って何をやってもいいということではもちろんない。例えば、誰かの自由な表現が他の誰かを傷つけてしまったり表現する自由を奪ってしまいそうなとき、主催者やスタッフは、この場でその表現をすることはできないと伝えてやめてもらう必要がある。
理由はどうであれ、誰かの表現を制することは正直気が重い。でも参加者が安心して表現できる環境を守ることは主催する側の責任。もちろん頭ごなしじゃなく、なぜその表現がここでは許されないのか自分の言葉でしっかりと説明する。
それでもやめてもらえなかったり、逆に火に油を注ぐような状況になりそうな場合は、「今日は帰って、そして納得できたら、また来て」と心をこめて、でも淡々と伝える。

＃ココルーム　#RAKU　＃自由な居場所

ヒント
24

表現を分かち合う時間

毎回活動の終わりを、その日取り組んだ表現や作品を分かち合う時間にあてる。つくった人自身が作品を見せながら発表してもいいし、スタッフが作品を見て気になったことをつくった人に質問しながら紹介してもいい。
自分の表現に対して他の人が興味を持ってくれることは嬉しいし、具体的な感想がもらえると創作意欲が湧く。表現が生まれた直後の記憶が鮮明なうちに言葉で説明することで、考えが整理されて、次の作品のアイデアが生まれたりもする。
発表を聞いている人は、なるべく作品のいいところを探しましょう。そしてスタッフは可能な範囲で記録を。活動の振り返りにも役立ちます。

#bamboo　#mirumiru　#ココルーム　#表現を分かち合う

ヒント
25

おしゃべりアートサロン

自慢の作品がたまってきたら、身近な人や活動に興味を持ってくれそうな人、活動を知ってほしいちょっと特別なゲストなどをアトリエに招いて、作品についておしゃべりするアートサロンを開く。作品を一つひとつ紹介し、感想を言い合ったり、気になったことをつくった人に直接質問する。

サロンのいい点は、展覧会と比べて手間もお金もかからないこと。作品を深く味わう機会となること。いろんな意味で安心が担保できること。そしてなによりつくった人と直接出会ってもらえる。アトリエの雰囲気を生で感じてもらうことができる。

準備したいのは美味しいお茶とお菓子（持ち寄りでもOK）。

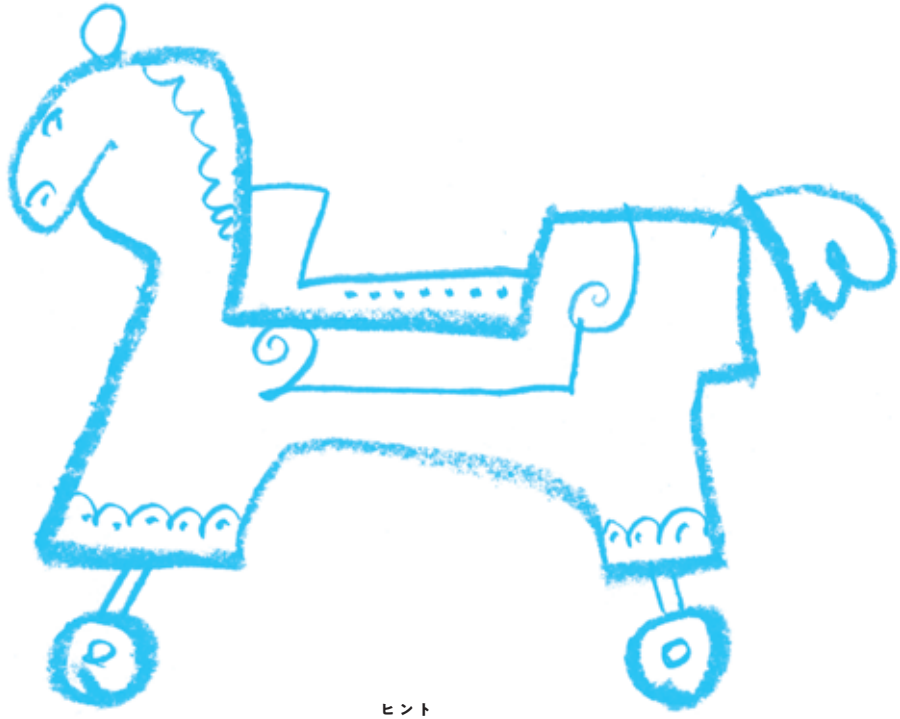
#アーピカル☆　#mirumiru　#表現を分かち合う

ヒント
26
展覧会の効能

作品のお披露目といえばやっぱり展覧会。会場を探したり、案内状をデザインしたり、人を配置したり、いろいろ苦労も多いけれど、それでも展覧会には展覧会でしか得られないものがある。

まず、展覧会に向けて作られた作品は、集中してつくられるせいか、いつもよりグッと良くなる。さらに展覧会で展示されると、作品の魅力がよりいっそう引き立つ。これはつくった人にとってとても嬉しく、誇らしいことで、その後の創作のモチベーションにもつながる。もちろん展覧会だから、いろんな人がやって来る。前からアトリエが気になっていた人、多様な表現に興味がある人、たまたま通りかかった人。作品を介してこそ出会える人はたくさんいる。そして展覧会は、つくった人だけではなく、アトリエにとってもお披露目の機会になる。

＃アーピカル☆　＃みずのみば　＃ココルーム　＃表現を分かち合う



ヒント
27

公募展に出そう

アトリエの中だけで分かち合っているのはもったいない！　そんなふうに思える作品が生まれたら、つくった人やその家族と相談して公募展に出してみる。
公募展はより多くの人に作品を見てもらえる機会。さらに、もし入賞した場合、専門家が作品だけを見て評価してくれたという事実は、つくった人やその家族にとってとびきり嬉しいことに違いない。また入賞という社会的な評価をきっかけに、本人やその表現への家族や親族の態度が変化していくこともある。
なお、展示や入賞発表の際には名前やプロフィールが公開されることもあります。実名で出すか作家名で出すか写真はどうするかなど、あらかじめ相談しておきましょう。

＃アーピカル☆　＃表現を分かち合う

インタビュー⑤

関西で表現をサポートする場をつくりたい

iTohen（大阪市北区）

鯵坂兼充さん

グラフィックデザイナー / iTohen主宰

大阪キタの中心、梅田から徒歩15分ほどのところにあるギャラリーとカフェと本屋の複合スペースiTohen。隔週替りの展覧会をはじめ、デッサン教室などさまざまな学びのイベントも行われているこの小さな文化の交差点は、代表／グラフィックデザイナー鯵坂さんの「表現をサポートする場をつくりたい」との想いから生まれました。

―― そもそもですが、iTohenがオープンアトリエとして扱われることに違和感ないですか？

鯵坂 ないですね。アトリエが表現が生まれる場なら、実際ここから生まれた表現や作品はたくさんあるし、デッサン教室など学びの場もやっていますから。

―― よかった（笑）。では、最初にiTohenを始めた経緯を。

鯵坂 25歳から大阪のデザイン専門学校で版画やシルクスクリーンを教えていたんですが、優秀な学生は卒業するとみんな東京へ行ってしまう状況がありました。つまり才能があっても、関西で表現だけでやっていくのは難しいし、場合によっては創作を続けていくことすらもままならない。それで彼らのような人たちの表現をサポートする場所が必要だと考えるようになり、気がついたら自分で始めていました。

―― 表現する人のサポートって、具体的にどういうことをしているんですか。

鯵坂 展覧会をすることも、本やコーヒーを売ることも、全部サポートにつながっていると思ってやっています。共通しているのは、手段としてデザインを用いているということ。展覧会のDM一つ取っても、デザインすればより遠くの人に届いて、結果的に多くの人に来てもらえる。同じように空間に関してもイベントに関しても、デザインを使っています。デザインは便利な道具で、使うことで表現をより多くの人

に届かせたり響かせたりすることができると思っています。

―― 複合的な空間も表現のサポートにつながっている?

鯵坂 そうですね。そもそもギャラリーに本屋とカフェを併設したのは、ギャラリーの敷居を下げるため。コーヒーを飲みに来たお客さんや本を買いにきたお客さんが、展覧会を観て帰るということは日常的におきます。また、本屋もカフェも人が留まる場所なので、居合わせたアーティストを紹介したり、お客さん同士をつなげるみたいなことはやりやすい。あと、展覧会終了後にアーティストと一緒に作品集をつくるみたいなこともあって、それはやっぱりギャラリーの横で本を売っているからというのが大きいと思います。

―― 最初に触れていただいた「学びの場」についても教えて下さい。

鯵坂 2017年から続いている月1のデッサン教室をはじめ、版画や木彫の教室、美術史レクチャー、うどんを打ったりぬかをつくったり、シリーズだったり単発だったり、いろいろやっています。

―― iTohenの立ち上げからしばらく経ってからなんですね。きっかけは?

鯵坂 専門学校での仕事を続けていく中で、学校では自分が思うような学びの場をつくりにくいと感じるようになりました。それで知り合いの絵本作家の阿部海太さんに相談したら、彼がいろいろ段取りしてくれました。他のワークショップやレクチャーも、これまでの展示作家や知り合いの知り合いなど関係の中から生まれたものばかりです。

―― デッサン教室はどんな人たちが参加していますか?

鯵坂 OLさんに家族、子どもや障害のある人も参加しています。

―― 何て言うか、すごくフラット!

鯵坂 閉じた場にならないように意識していますね。例えばメンバーを固定しないために各回ごとに募集したり。

―― ちなみに障害がある人を受け入れるようになったのは?

鯵坂 受け入れたというより、その人も教室を始めたきっかけの一つ。自閉症の女性なんですが、絵を描くのが好きでわざわざ神戸の教室に通ってる。だったらいつかうちでやりますよと言ってて、それが実現しました。ただ僕にとっては障害のあるなしは実はどうでもいいんです。大事なのは心が動くかどうか。外部からの資金的支援もなく自営でやってるから、好きにできるのが自慢です。

Books Gallery Coffee iTohen

大阪市北区本庄西2丁目14-18 富士ビル1F
06-6292-2812
itohen.info

インタビュー⑥

刺激し合う、オープンなものづくりの現場

FabCafe Kyoto（京都市下京区）

浦野奈美さん　服部木綿子さん

ものづくりとコラボレーションを生みだす拠点として2015年にオープンしたFabCafe Kyoto。築120年の町家をリノベしたカフェには3Dプリンターなどのデジタル工作機器が置かれ、誰もが気軽に使え、またその様子を誰もが見ることもできます。表現と交流の場、これもある意味オープンアトリエ。

―― まずはFabCafeが生まれた経緯を。

浦野　FabCafeは、ロフトワークというクリエイターコミュニティを持つ会社が始めました。きっかけは、ロフトワークとクリエイティブディレクターの福田敏也さんが「Fab」というアイデアに出会ったこと。レーザーカッターなどの工作機械をカフェというオープンな場所に置くことで、誰もがものづくりをできる環境を作ろう、と。それで、2012年に最初の拠点となるFabCafeが東京渋谷に生まれました。基本はカフェで、エスプレッソマシン等のカフェの厨房機器のならびにレーザーカッター等の工作機械がある。飲み物をカウンターに取りに行き、その流れで横にあるレーザーカッターでノートを加工したり、アクセサリーをつくってしまうような環境です。

―― お茶を飲みながら、他の人が何かつくっているのを見ていると、自然と興味が湧きますね。自分も何かつくってみたくなる。

浦野　FabCafe Tokyoでは実際にいろんなコミュニケーションが生まれました。「何つくってるんですか?」からアイデアの交換が始まったり、意気投合して一緒に企画書をつくりだしたり。オープンな場なので、何をつくっているかも、その過程も隠すことはできない。だからこそ交流やコラボレーションが生まれる。オープンであることを最低ラインにしよう、ということは意識していました。

―― FabCafe Kyotoができたのは2015年です

ね。京都を選んだ理由は？

服部　実は京都では「MTRL（マテリアル）」という素材・材料を介してものづくりに関わる人と企業を支援する拠点を2014年に始めていて、それが2017年にFabCafeになりました。FabCafeというものづくりができる場所が生まれたことで、人が出会い新しい関係が生まれるようになった。京都には研究機関や、ものづくりをしている企業の本社や大学も多く、伝統素材をつかったクラフトも発展しているので最適でした。

――　現在も、素材のサンプル展示があったり、素材メーカーとクリエイターをつなぐイベントなどを実施されていますね。

服部　サンプル展示では、伝統素材や自然素材、工業素材まで、あらゆる素材を並べています。素材メーカーは別領域の人に思いもよらない使い方をして欲しいという期待があり、一方クリエイターは用途に適した素材を探していたり、あるいは素材自体にインスピレーションを求めている場合もあります。その辺りは専門の担当が、例えばこんなものがありますよと提案したり、そのニーズをメーカーに伝えたりしています。

――　FabCafe Kyotoとして独自の支援プログラムも展開されていますね。

浦野　COUNTER POINTという、個人的な創造性や衝動にもとづくプロジェクトを対象としたプログラムです。3ヶ月FabCafe Kyotoを拠点に活動してもらい、さまざまなサポートを行いながら、かたちにしていきます。そもそもFabCafeは、別領域の人が出会いコラボレーションできる場所を目指してスタートしましたが、ときには「いつか何かやれるといいですね」止まりでなかなか発展しないこともあります。そこでかたちにしていくことまでを仕組みとしてつくれないかという考えで始まりました。「これをつくりたい」というピュアな好奇心や初期衝動さえあれば、専門知識や技術がなくてもチャレンジできます。

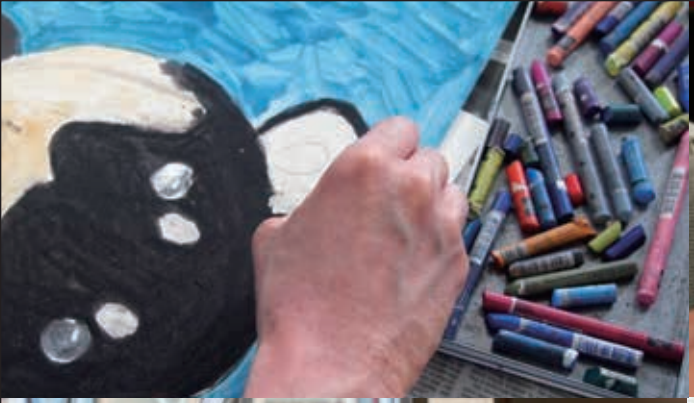
――　具体的にどういうサポートを行っているんですか？

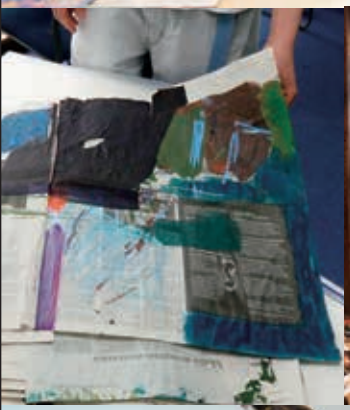
服部　デジタル工作機器のレクチャーをしたり、ワークショップや展示をしたことのない方に企画や運営のサポートをしたり、アウトプットに向けた筋道を一緒に整理したり、はたまたフィールドリサーチを一緒にしたり。私たちがさまざまなプロジェクトの企画・ディレクションをする中で培ってきた経験や知識を活かして、全力で支援しています！

FabCafe Kyoto

京都市下京区富小路通五条下ル本塩竈町 554

fabcafe.com/jp/kyoto/





ON AIR

ヒント
28

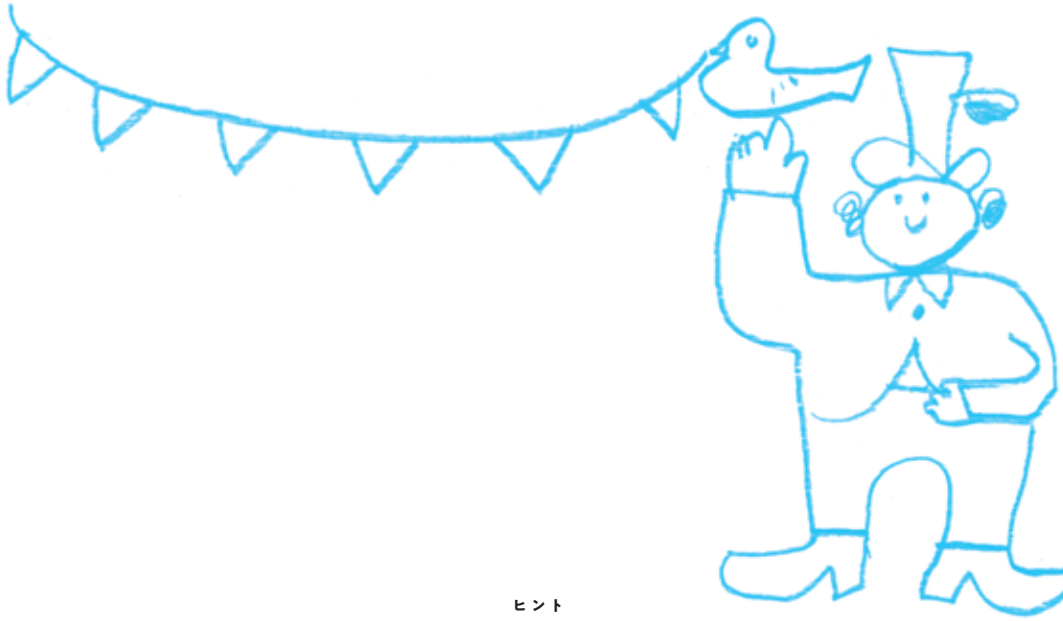
なるべく早く発信する

活動が終わった後のアトリエ。今日もみんな思い思いの表現を楽しんで帰っていった。残された作品の整理をしながら「今回もいい時間だったな」と思えたら、気持ちと記憶が薄れないうちに、印象的だったことを言葉と写真でSNSに発信する。生まれたばかりの作品のディテール、それが生まれた不思議な理由、誰かが口にしたおかしな一言、他の誰も気づかなかった〇〇さんの小さな変化など。

アトリエ活動はある意味ライブみたいなもの。そこで感じられる豊かさは、時間をかけて整理されたレポートではなかなか伝わらない。その日その場に居合わせた人のフレッシュな言葉を通してこそ伝わるものがある。だから言葉は短くても荒削りでも大丈夫。

作品や参加者の写真、名前などの公開については、必ず前もって確認をしましょう。

#mirumiru　＃場を開く



ヒント
29

作品、町へ行く

アトリエで生まれた作品を町に持ち出して、空き店舗のショーウィンドウを使って展示したり、行きつけのカフェやお店に飾ってもらったりする。そうすると作品はアトリエにあった時とは違った意味を持って機能し始める。

町の一角に作品が置かれると、その空間はちょっと賑やかになる。そして作品に気づいた人は、それについて考えたり、味わったりする。作品をつくった人やそこに作品を置いた人のことを想像し、興味を持つ。それについて誰かと話をする。会話や出会いが生まれる。

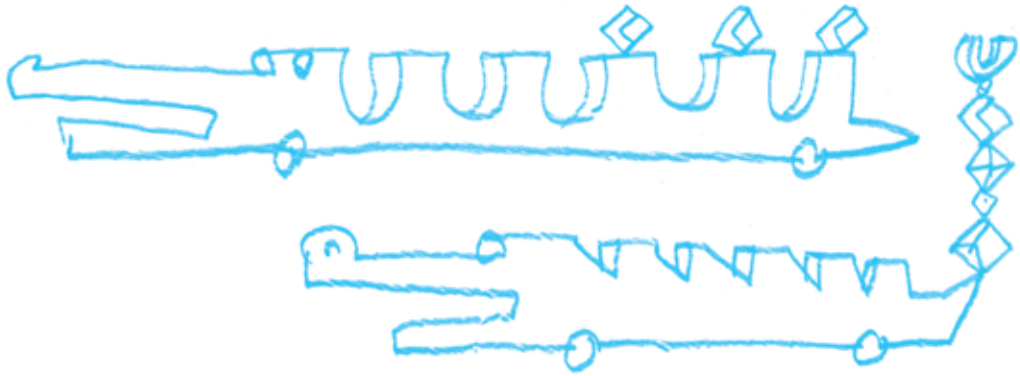
アトリエにとっては、作品を町の人たちに見てもらう機会になるし、自分たちの活動が町とつながっていることを実感できる。

#RAKU　＃アーピカル☆　＃場を開く

ヒント
30
コラボレーション
素材がつなぐ縁

創作の材料として近所のスーパーからダンボールをもらうとき、あえてお店の人に「こんなアトリエをやっているので、定期的にもらってもいいですか?」と話してみる。それだけで、まずはアトリエの存在を知ってもらえるし、「そういうことならこんなのもあるよ」と素材として使えそうなものを提案してくれるかもしれない。
お店や企業にとって、要らなくなったり使いみちのない資材がオープンアトリエのような場で使われることは、地域や社会への貢献になる。場合によっては、新しい使いみちを発見するきっかけにもなる。そこまでくると立派なコラボレーションだ。
さらに、素材のやりとりを通して生まれた関係は、次の展開につながるかもしれない。お店に展覧会のポスターを貼らせてもらったり、オフィスに作品を飾らせてもらったり。

#FabCafeKyoto　＃道具と材料　＃場を開く



ヒント
31
デザインにもこだわりたい

参加募集のチラシ、展覧会のDM、活動を紹介するウェブサイトなどの制作。せっかくだからデザインにもこだわりたい。デザインの目的は、伝えたい情報や気持ちをより遠くの人に伝えること。アトリエとは全く関係がなかった人たちにも興味を持ってもらうきっかけがつくれるかもしれない。

知り合いにプロのデザイナーがいるなら、依頼するのがいちばん手っ取り早い。だけど、もちろん自分たちで頑張ってデザインしたっていい。その場合は、参加者が生み出した作品をメインのビジュアル素材として使うのがおすすめ（もちろん本人に許可をもらいましょう）。タイトルやキャッチコピーを手書きで書いてもらうのもいい。参加者の表現こそが、アトリエの楽しさや自由さをもっとも上手に語るはず。

初めてデザインする人へ。完成したと思っても、必ず一晩寝かせましょう。翌朝見直したとき、自分で「行ってみたい」「参加したい」と思えれば、その時が本当の完成です。

#iTohen　＃アーピカル☆　＃ココルーム　＃場を開く

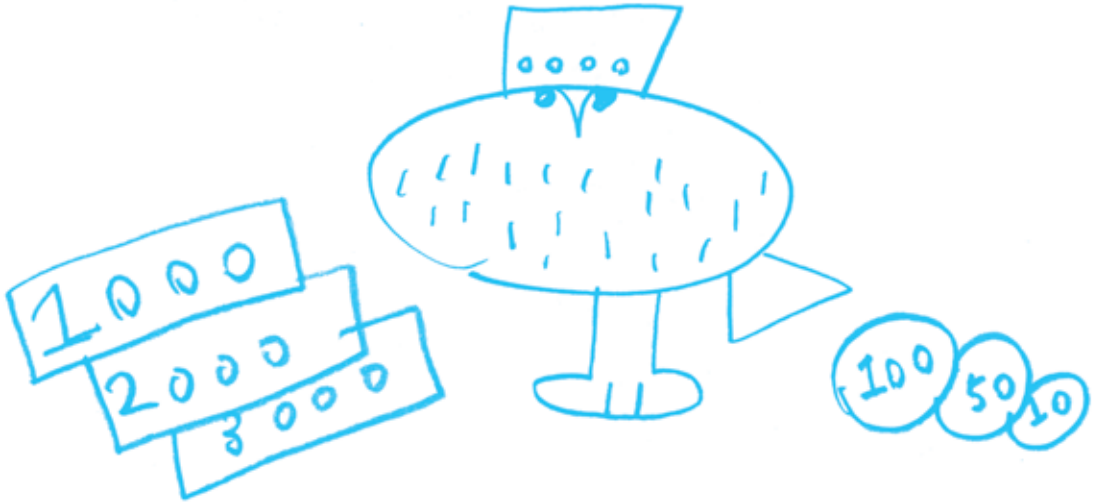
ヒント
32

それ、うちでやってみない？

アトリエを続けていくうちに、興味を持っていろんな人たちが活動を見学しに来てくれるようになった。どうして興味を持ったのか一人ひとり聞いていくと、それぞれやりたいことのアイディアがある様子。例えば、地域の子どもを集めて自分が考えたワークショップをやってみたいとか、近くの大学の海外留学生に声をかけてそれぞれの国の料理を一緒につくる会がしたいとか。そこで「それ、よかったらうちでやってみませんか?」と提案してみる。

場所や、その場所が持っているものを有効に使っていくことは、アトリエを運営する人、利用する人どちらにとっても気持ちのよいこと。物理的に場所を開くことからもう一歩進んで、その場所をどう使えるかを一緒に考えることで、新たな展開が生まれるかもしれない。

#iTohen　#FabCafeKyoto　#場を開く



ヒント
33
参加費をもらう

参加者の負担を減らしてできるだけいろんな人に来てほしいと、ボランティアで始めたオープンアトリエ。でも、続けていくうちに画材代や場所代、講師代など、運営にかかる出費がかさんで、捻出するのがだんだん厳しくなってきた。そんなときには参加者から参加費をもらうことを検討する。

参加費について考えることは、活動の内容や目的を見直すきっかけになる。一方、参加費を払う参加者（もしくは保護者）にとっては、「お金を払ってでも参加したい」という気持ちやモチベーションにもつながるかもしれない。

参加費のもらい方はいろいろ。1回ごとにもらったり、半年分や1年分をまとめてもらったり、あえて金額は決めず寄付をお願いしたり。参加してくれている人たちや人数、アトリエの規模、活動の内容など、もろもろのバランスで決めましょう。

＃アーピカル☆　＃ココルーム　＃みずのみば　＃続けるために

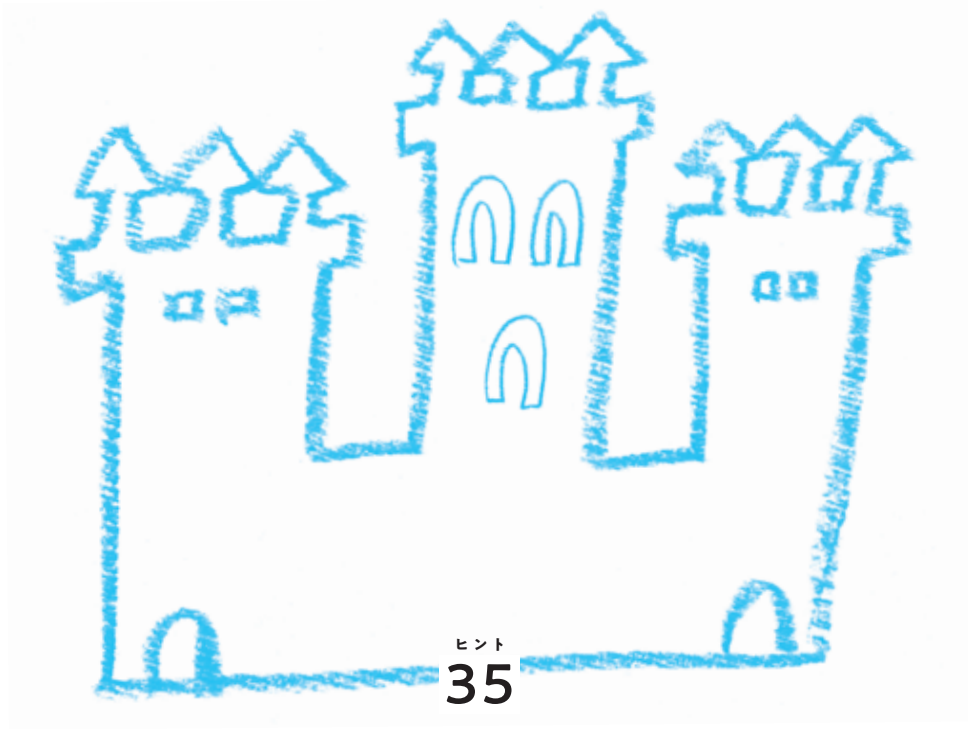
ヒント
34
福祉制度を活用した運営

知り合いと始めたオープンアトリエ。誰でもウェルカムと活動していくうちに、いつの間にか参加者がいっぱいになった。嬉しい反面けっこう大変。一人ひとりに合わせたサポートには限界があるし、条件が合わずお断りするケースもでてきた。そんなときは福祉制度を活用した運営の可能性も考えてみる。

制度を使った運営は、資格を持ったスタッフがいる前提なので、幅広く適切なサポートができる。また、参加者の経済的負担が減らせるなど、参加のハードルも下げられる。その反面、体制の確保や環境の整備などさまざまな条件を満たす必要がある。事務仕事などやらなければいけないこともすごく増える……。

一長一短。でも、可能性として一度考えてみるのもいいと思います。気になった人は障害とアートの相談室までお気軽にご相談下さい。

#bamboo　#mirumiru　#続けるために



ヒント
35

仲間は意外と身近にいる

アトリエをたった一人できりもりするのは大変。準備や運営など具体的にやらなきゃいけないことも多いし、何かトラブルが起こったときに一人だととても心細い。アトリエを長く続けていくなら、一人で背負わず一緒に走ってくれる仲間がいた方がいい。

とはいえ、同じビジョンを共有できるような仲間はそう簡単に見つからないというのも現実。そこで、身近にいるアトリエに興味を持ちそうな人に声をかけてみる。アートや表現に興味がある友人、福祉関係で働いている知人、参加者の保護者、参加者が利用している福祉施設のスタッフ、アトリエの卒業生などなど。最初は「1回アトリエ遊びにこない？」くらいでもいい。

あなたやアトリエのことを知っている人たちだからこそ、それぞれの関わり方をリアリティを持って考えてくれるかもしれない。

＃アーピカル☆　#bamboo　＃みずのみば　＃ココルーム　＃続けるために

インタビュー⑦

表現を通して変化する人と人との関係

ココルーム（大阪市西成区）

上田假奈代さん

詩人／ NPO法人こえとことばとこころの部屋（ココルーム）代表

日雇い労働者の街として知られてきた大阪市西成区釜ヶ崎にある、カフェとゲストハウスのふりをした表現と出会いの場ココルーム。日々さまざまな人々が訪れ、関わり合い、さまざまな表現が生まれている。2012年からは誰でも無料（カンパ歓迎！）で参加できる釜ヶ崎芸術大学をスタート。代表で詩人の上田假奈代さんに話を聞きました。

―― まずはココルームのこれまでを。

上田 2003年に大阪市の現代芸術振興のための事業に参画して、浪速区にあった新世界フェスティバルゲートに拠点を構えたのがはじまり。公共性や公益性を考え、表向きカフェのふりをしながら、アート好きじゃない人にも開かれた表現と出会いの場をつくってきました。釜ヶ崎へは市の事業が終了した2008年に、ここでなら何かできることがあるかもしれないと、拠点を移しました。以前から釜ヶ崎には芸術の根源的なものがあると直感で感じていたし、いろんな運動団体はあるけれど芸術の団体は一つもなかったから。

―― 実際に移してみてどうでした？

上田 本当にいろんなことが起きて、そのたびにいろんなことに気づかされます。例えばまだ来て間もない頃、毎日お店に来ては他のお客さんとトラブルを起こすおじさんがいました。スタッフは出入り禁止にしようって言うけど、私はどうも腑に落ちなくて、トラブルのたびに話を聞いて、「とりあえず今日は帰って、来たいんだったらまた明日切り替えて来て」ということを1年以上続けました。そしたらある日、その人が突然手紙を書くワークショップに参加して、そこで彼が読み書きができないことに気づきました。つまり時間をかけて関係をつくったことで、その人にとってようやく安心して自分を出せる場になった。ずっと表現するってことを推奨してきたけど、大事なのは年齢や

立場に関わらず、どんな人でも安心して表現できる場をつくることなんだと気づかされました。

―― 表現を、いわゆる作品をつくることだけではなく、もっと普通のこととして捉えている？

上田 そうですね。私自身、普通の人が自分の気持ちを自分で表すことに尊さを感じていて、ずっとそのことに向き合いたいと考えてきました。釜ヶ崎ではそれができていると思います。

―― そうした考えは釜ヶ崎芸術大学（以下、釜芸）のプログラムにも現れていますね。みんなで井戸掘ったり、おかゆを食べて話したり。もちろん詩や俳句のワークショップがあったり、他にも天文学や数学の講座があったり。見ようによっては何でもありというか。

上田 あえて「芸術大学」と名乗っているのにね（笑）。ただ、あらためて芸術って何かを考えると、生きる技術とも言える。そういう視点からすると工夫はアートだし、とりわけ釜ヶ崎では全てがアートになる。実際に空気を読むのがわりと下手なみんなでつくったり話したりすると、クリエイションは必ず入ってきますね。

―― ちなみに釜芸を始めた理由は？

上田 釜芸が立ち上がる以前に、詩やダンス、ドラマなど月１回の表現講座というのがあって、そこに禁酒を始めたばかりのアルコール依存のおじさんが参加していたんです。結果的にその人はお酒をやめることに成功したのですが、後で聞いたら「酒をやめるのは、クスリ（抗酒剤）やない。人生の楽しみでやめるんや。でも1ヶ月先じゃ生きてるかわからん」と言われました。だったらもっと間隔をつめて、それも通年で開催できたら、表現によって参加する人たちの生活のリズムをつくっていけると考えました。

―― 最後に、人が表現し始めることで、何が起こると思いますか？

上田 まず、この人はこういう人だと思っていたことが、その人から出てきた表現を見ることで変わっていきます。そして、こちらの心が動かされて「おもしろい！」と感じたり伝えたりすると、またその人も変わっていきます。自己肯定感という言葉で説明されたりもするけれど、相手だけではなくこちらも変化する。そうやってどんどんお互いがやわらかくなってほぐれていくから、関係そのものが変わっていく。そしてまた一つ表現できる場が育っていくのだと思います。

ココルーム
（NPO法人こえとことばとこころの部屋）

大阪府大阪市西成区太子 2-3-3
06-6636-1612
cocoroom.org

インタビュー⑧

そこにいることも含め 表現として一人ひとりを受け止める

オープンアトリエ mirumiru（奈良県香芝市）

森下静香さん　Good Job!センター　センター長
松本綾さん　mirumiru担当スタッフ

障害のある人と新しい仕事づくりを提案するGood Job!センター香芝（以下、GJセンター）で月1回行われているmirumiru。GJセンターがオープンする前から、障害のある人が表現活動できる地域の拠点をつくりたいという思いからスタート。自主的な運営と福祉制度を組み合わせて、安定した活動をつづけています。

――　mirumiruが生まれたきっかけは2015年に厚労省事業として実施されたオープンアトリエの試行プログラム。森下さんは当時たんぽぽの家のスタッフとして関わっておられましたね。

森下　試行プログラムが行われた背景として、障害のある人たちは学校を卒業すると表現活動をする場が減ってしまうというアンケートの結果がありました。ただ、全ての福祉施設でアート活動を行う必要はなく、それぞれの得意なことをしたらいい。むしろ地域の中で通える場所に、選択肢としてアトリエが必要なんじゃないかということから、オープンアトリエというアイディアが生まれてきました。当時すでにアーピカル☆の活動をされていた岡﨑潤さんに相談し、講師となっていただきスタートしました。

――　当初から手応えは感じていた？

森下　最初の募集を近隣の支援学校や福祉センター、ウェブで告知をしましたが、予想以上の申込みがあり、ニーズを感じました。またプログラムに参加した人が後にオープンしたGJセンターのメンバーになったり、運営に関わった人や関心を寄せてくれた人がアートサポーターとして関わってくれたり、そういうご縁が生まれたのも大きな手応えでした。

――　活動を見学させてもらいましたが、会場だけでなくGJセンターのいろんな資源をうまく使って運営されている印象を受けました。

森下　mirumiruは参加費を頂いて運営する一方、

GJセンターのスペースを有効活用し、また障害のあるメンバーが仕事として運営をサポートしています。例えば、商品撮影のスキルを活かして活動の様子を記録する人がいたり。また、プログラムの最後に出すおやつも、GJセンターのカフェで素材などにこだわってつくったものです。

―― 講師の図師雅人さんにお話をお伺いしましたが、参加者が快適で楽しいこと、ご家族やサポーターも一緒にわいわい言い合えることが大事とおっしゃっていました。

森下 いろんなアトリエのかたちがあっていいと思いますが、mirumiruとしては、参加者に何かを教えたりするのではなく、その姿ごと認めていくことを大切にしていますね。興味や関心を持つ能力というか、好きなことがある人は強いと思っているので、やりたいことに出会う場になればいい。そしてご家族やサポーターにとっても、アトリエが多様なアートの楽しみかたを学び合う場になればと思っています。

―― 松本さんが心がけていることは?

松本 私自身あまり表に出ないように心がけています。仕事としては事前の細かい連絡調整や準備、片付けなどをしっかりするようにしています。だから実際アトリエの時間はあまりやることはありません(笑)。あと、図師さんの話と同じですが、参加者だけでなくご家族や支援者などもこの場を楽しめているかということは、いつも気にかけています。

―― ところで、参加者のみなさんはそれぞれ描きたいものを描いて楽しんでいましたが、ああいう状況は最初から?

森下 最初からそういう人もいましたが、もちろん全員ではないです。ただ、ここは好きなことをやれる場所だとわかれば、やがて自ずと自分でも何かしたいと意識が変わっていきます。だから別にすぐに何かを表現しなくてもいい。むしろ、歌っていたり踊っていたり、そこにいることも含めてその人の表現として受け止めることが重要だと考えています。

―― 最後に、今後の展開などがあれば教えて下さい。

森下 嬉しいことに今は活動が安定しています。創作ができて、材料や作品を置いておける場所があって、サポートするスタッフやボランティアがいて、記録もできて、お茶やお菓子を準備できる体制もある。活動が継続できていれば、今は無理でもいつか来れる人もいます。こういったアトリエが、それぞれの地域で実現していけばいいなと思います。

オープンアトリエ mirumiru
(Good Job! センター香芝)

奈良県香芝市下田西 2-8-1
0745-44-8229
goodjobcenter.com

ASUKA
SARA

各地のオープンアトリエ（関西版）

今回紹介した以外にも、関西の各地で自由にアート活動が楽しめるアトリエがあります。ここではその一部をご紹介。

美術教室ライプハウス（大阪）

生活の楽しみとして絵を描く人からプロを目指す人まで個別にサポート。

東大阪市寺前町1-10-18 ふぐ政ビル2F
ripehouse.jp
06-7161-7624

子どもの絵画教室アトリエ・サジ（京都）

生活の中の遊びを大切に、一人ひとりの子どもたちに寄り添うアトリエ活動。

京都市上京区芦山寺通大宮西入ル中社町341-1
075-431-8602

一般財団法人カナウ（兵庫）

子どもから大人まで、幅広く障害のある人のアート支援を展開。アートに関する相談対応も実施。

神戸市灘区篠原北町1-2-4
bari-furi.biz
078-882-3328

アトリエくじらのクー（奈良）

長年地域に親しまれる子どもアトリエ。広いスペースを使い、個別対応で。

生駒市あすか台25-44
0743-20-5987

ほっとチョコレート（和歌山）

自閉症やダウン症の人がアートを楽しむ。午前はアート、午後は季節のイベント。

和歌山市三沢町1-2 中央コミュニティセンターで実施
090-2702-9733

NPO法人あとからゆっくり 日曜教室（大阪）

月1回、講師を招いてアート教室を実施。展覧会も精力的に実施。

大東市南津の辺町2-21
072-813-7595　atokuridaito@dream.jp

アトリエ・ウーフ（京都）

30年以上続く地域の障害のある人たちが通うアトリエ。作家として巣立つ人も。

京都市山科区四ノ宮大将軍町33
080-3822-3809　aloman2uf@gmail.com

アートスペースくるみ（兵庫）

倉庫を改装したアトリエでの作品の制作また、姫路中心に集めたアート作品の常設展示のコミュニティ。

姫路市飾磨区清水3丁目34番地 松岡ハイツ1階1号室
npo-kuruminclusion.org
079-280-1953　info@npo-kuruminclusion.org

アトリエもじけハウス（和歌山）

築100年古民家を活用し、地域の子どもたちと絵画教室を実施。

田辺市中屋敷町54
mojike.com
080-5542-9745　info@mojike.com

開催日や参加費の有無などは、それぞれ直接お問い合わせください。また、「うちの近くにもこんなアトリエがある」という情報があれば、ぜひ障害とアートの相談室へご連絡ください。

おわりに

私たち障害とアートの相談室がオープンアトリエについて考え始めたきっかけは、拠点である奈良県で行った障害のある人のアート活動に関する調査でした。この調査の中で、アート活動が好きな障害のある方やそのご家族などから「学校に通っている間は美術の授業などで絵を描く時間があったが、卒業して働き始めるとアートに触れる機会がなくなってしまった」という声が聞かれたのです。
そこで、特別支援学校の美術の先生へのインタビューや、地域にある絵画教室へのアンケート調査などを実施。たしかに、学校を卒業した障害のある人が自由にアート活動に参加できる機会は少なく、また地域の絵画教室などにも通いにくい、という状況が明らかになりました。
この問題にはどのような背景があるのでしょう。まず、障害のある人のアート活動が世間に認知されていないという点。また、福祉作業所や企業に所属している障害のある人たちは、日中仕事をしているため、創作的なプログラムに触れる時間がないという点。また、地域の絵画教室などに関しては、教室の方が障害のある人との交流経験が少なくサポートができないと断ってしまったり、障害当事者やご家族も「自分（の家族）が行くことができるのだろうか」と自粛してしまうことがある点、などなど。構造的なものからアクセシビリティの課題まで、幅広い要因が考えられました。

障害のある人がアートに取り組める機会が少ないということ。これは様々な社会的課題につながる問題だと私たちは考えています。そもそも、アート活動に限らず、障害のある人が自由に余暇の時間を過ごし、やりたいことに取り組める場はそれほど多くありません。そのため障害のある人の中には、生活の空間や人とのつながりが、福祉施設や会社、家庭に限定されている人もいます。
以前より社会学の分野では、人の豊かな生活のためには、職場でも家庭でもない安心して過ごせる空間＝サードプレイスが重要だと言われてきました。障害のある人にとって、自由にアートに触れられ自分を表現できる場所があれば、そこが日常から離れてふと一息つける第三の場所にもなりえるのではないか。そしてそれは、障害のある人だけでなく誰にとっても大切な場所になるのではないか。そんな想いから、多様な人に開かれたアートスペース、すなわちオープンアトリエに関する活動がスタートしたのです。

さて、そうやって私たちがオープンアトリエという言葉を使いはじめたのが2015年。そこから5年経ち、障害のある人のアートを取り巻く世間の様子も少しずつ変わっているように思います。
まず、さまざまなメディアで取り上げられることを通じ、障害のあるアーティストやその作品がこれまで以上に広く知られるようになってきました。また、アートのもつ社会包摂的な力にも注目が集まり、色々な人と協働するアートの必要性も認知されてきたように感じます。そして、まだまだ少ないとはいえ、誰でも通うことのできるアートスペースが各地域にあることも少しずつ見えてきました。
一方で、私たちも、もっと幅広いスタイルのオープンアトリエがあるのではないかと考えはじめました。当初私たちが想定していたのは、美術教室など、決められた人がそこに通ってアート活動に取り組むための場所です。しかし、例えばアートイベントを行っているカフェなど、多目的で多様な人が自由に出入りできる空間も、オープンアトリエ的な場所になりえるのではないかと感じはじめたのです。
こういった変化を踏まえ、今回の冊子づくりにおいては、いわゆる絵画教室的なスペースから、多様な社会的背景を持つ人が出入りするカフェ、ゲストハウス、企業やクリエイターが集まるスペースなどへも調査の範囲を広げました。より大きな射程でオープンアトリエを捉えるとともに、いろいろな立場の人がオープンアトリエを始められるような、具体的なヒントを探すことを目指しました。

さて最後に、編集後記にかえて今回の調査の中で特に印象に残ったことを。
どこの調査先でも特徴的だったのが、講師や主催者のみなさんのたたずまいでした。一般的には講師というと、アートのことをよく知っていて、それを参加者に教える人が想像されます。しかし、今回訪問した団体・活動のみなさんは、教えることよりも、寄り添ったり、見守ったり、一緒にいることを大切にしているように感じられました。もちろん、実際の振る舞いや考え方などは異なりますが、教える／教えられるを超えたフラットで居心地の良い関係性を築こうとされていることが、それぞれのたたずまいから感じられました。こうしたたたずまいについては、ヒントと呼べるほど具体的なものではないため今回のヒント集の中には掲載できませんでした。しかしオープンアトリエをつくるためには不可欠な要素だと感じたので、ここでお伝えします。

私たちは、アートとはいろんな人が出入りできる広場のような存在だと考えています。決められた答えのない自由な表現の実践だからこそ、多様な人がそこに出入りすることができ、日ごろの立場や役割を離れ、対等な目線で、1対1でコミュニケーションすることができるのです。そして、オープンアトリエとは、そんなアートの力を実際の場や活動に落とし込み、まちを拡張していく取り組みなのではないかと思っています。

このヒント集が、まちにユニークなオープンアトリエが広がっていく一歩になれば嬉しいです。

一般財団法人たんぽぽの家

あわせて読んでほしい
障害とアートの相談室の冊子

なやんで ひらいて 2歩すすむ ためのハンドブック

障害のある人のアート活動を支援する人や当事者などの具体的な課題と、40人の先進的な活動を行う実践者からの考えや取り組みの事例を掲載。

2015年3月発行
A5サイズ／64ページ

価値・意味：なぜアートに取り組むの?／道具・画材・素材／環境／支援：創造的な活動が生まれる環境とは?／仕組み／資金：マネジメントの視点も重要です!／保存・記録　発表：社会に発表していきたい!／権利　仕事：権利を守り、仕事につなげたい!

地域にひろがるオープンアトリエ

すすんで ひらいて つながる ためのハンドブック

障害のある人もない人も一緒にアートを楽しめる「オープンアトリエ」。その必要性と可能性について、実践者や専門家などの声を元に考える。

2016年3月発行
A5サイズ／89ページ

オープンアトリエのはじまり／自由に表現する場をつくる／自分たちのまちをアトリエに!／豊かな関係性を育む／表現を分かちあう／生活のなかにあるアート／ 4つのオープンアトリエ　実践編

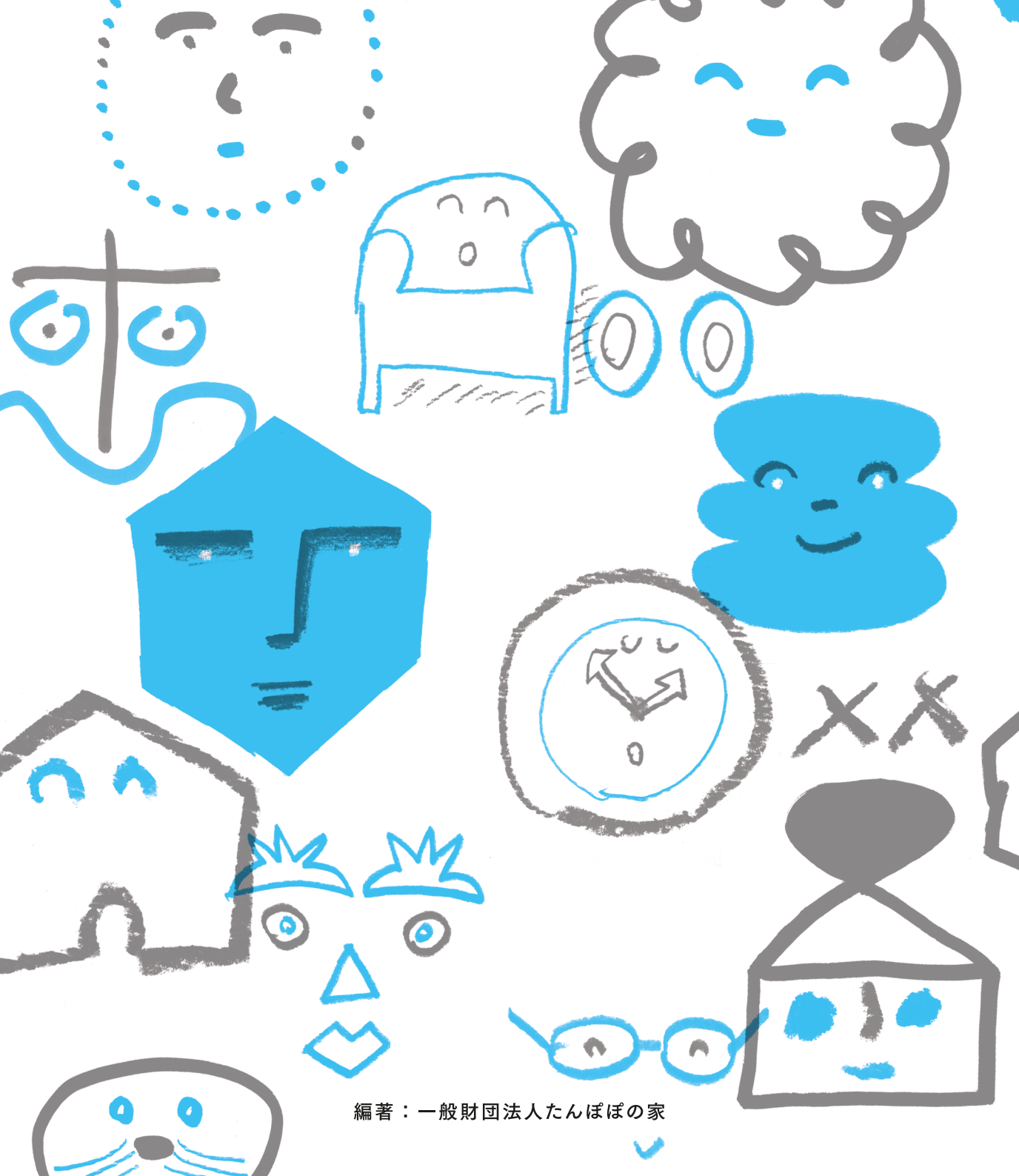
上記の冊子は、インターネットからPDFファイルをダウンロードできます。
また、製本された冊子がほしい方へは、郵送でお送りすることも可能です(数に限りがあります)。
https://artsoudan.tanpoponoye.org/publications

オープンアトリエのつくりかた
表現の場をひらいてつながるためのヒント集

発行日：2021年3月31日
発行元：一般財団法人たんぽぽの家
〒630-8044　奈良市六条西3-25-4
Tel 0742-43-7055
Fax 0742-49-5501
Email artsoudan@popo.or.jp
URL http://artsoudan.tanpoponoye.org/

企画・執筆：大井卓也、岡部太郎、中島香織、中野温子（一般財団法人たんぽぽの家）
編集：岩淵拓郎、宮浦宜子（メディアピクニック）
デザイン：小山直基　イラスト：遠山 敦

本冊子は「令和２年度　障害者芸術文化活動普及支援事業」（厚労省）の一環として制作されました。



編著：一般財団法人たんぽぽの家